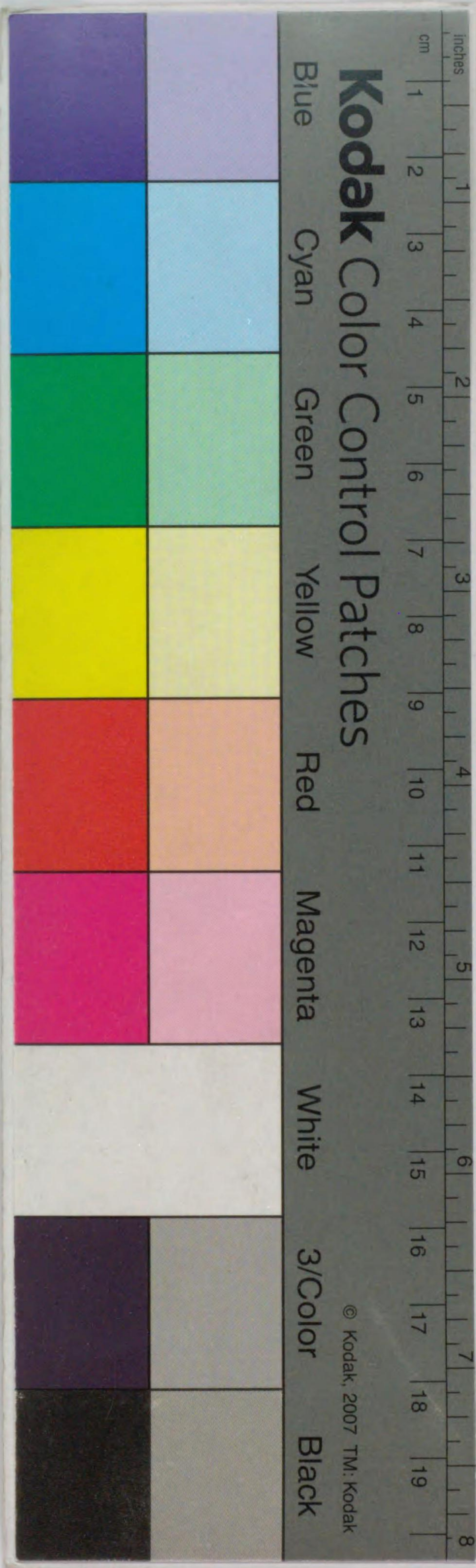




Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



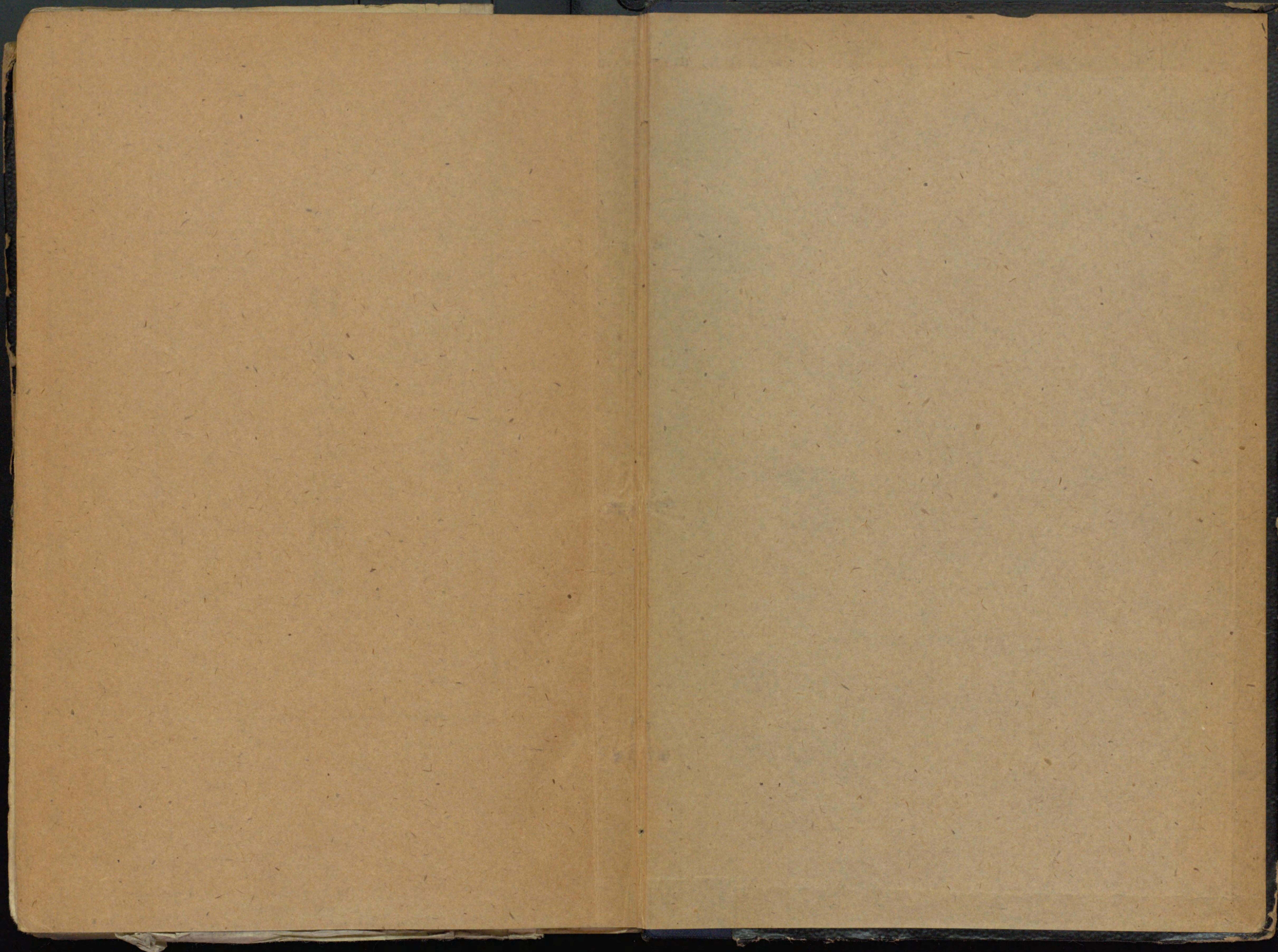
Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

612-11
1200501534648

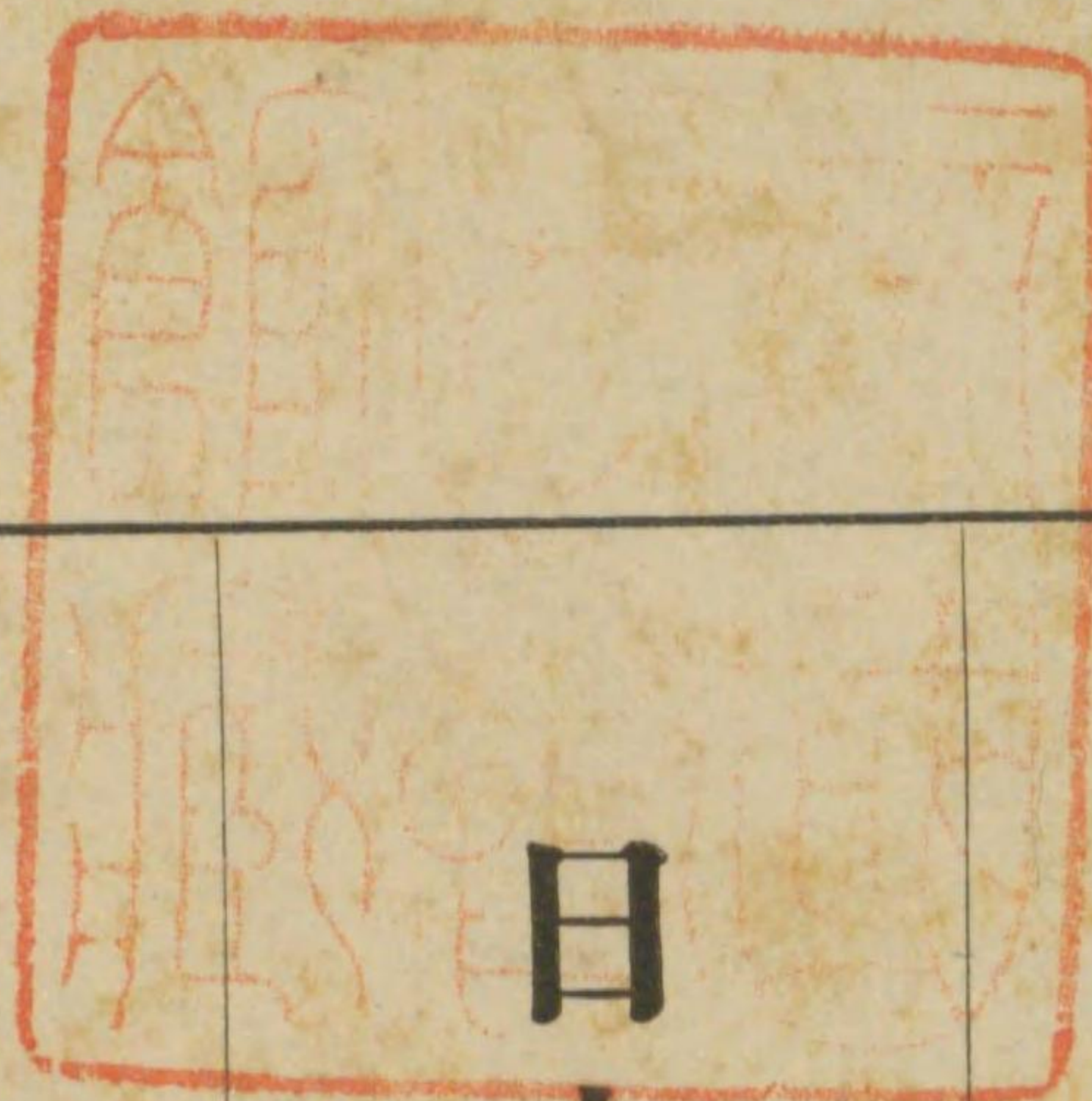
2
1

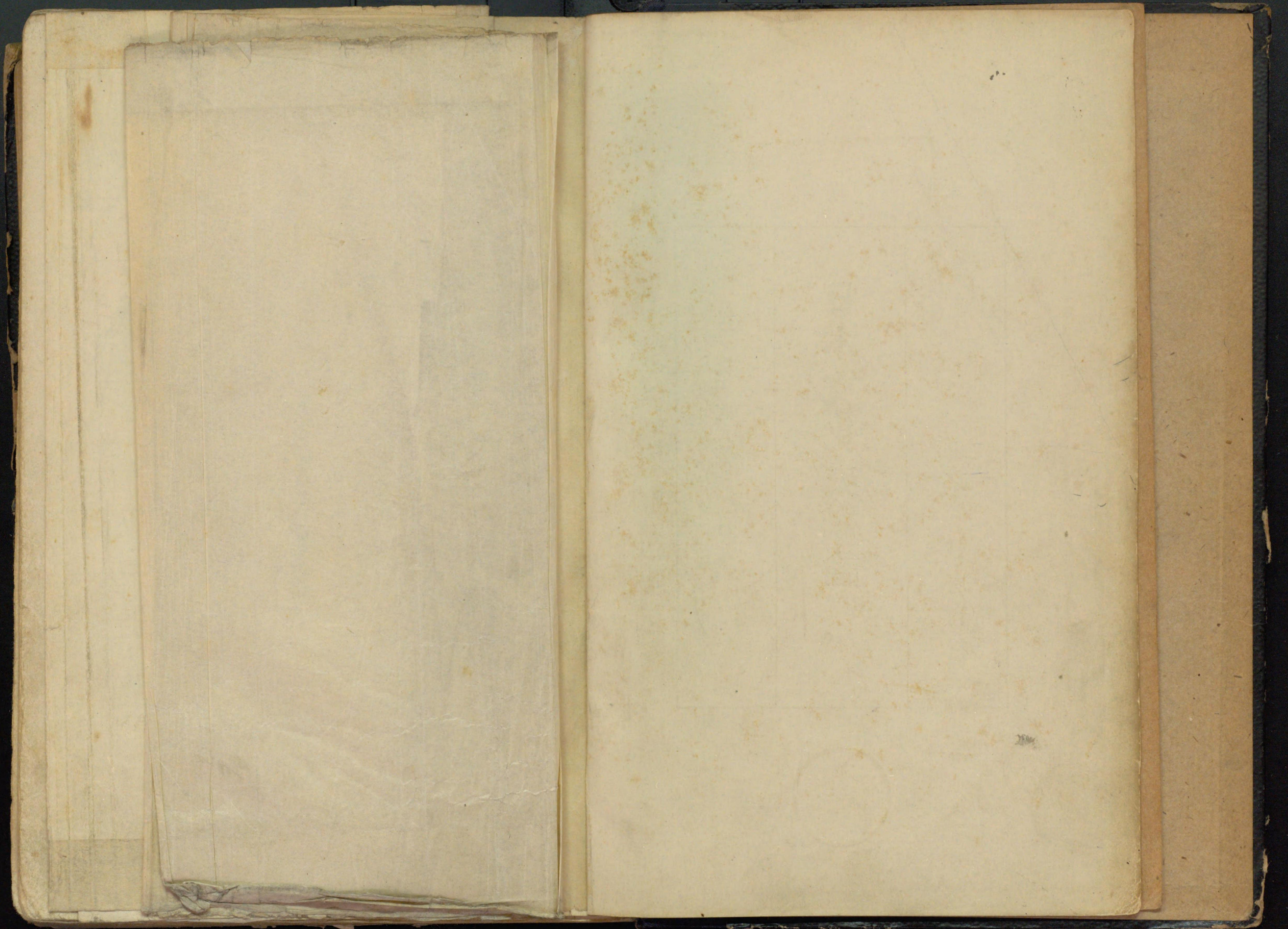


西村眞次著

日本文化史概論

東京堂書店刊行





卷頭圖版 文化地帯及文化移動線圖

地球上に一種の地帯が存在して、そこにそれ／＼特性のある文化が存在するといふ假定が人類學者キツスラアによつて提供された。圖の茶褐色陰影で示されてゐるのは中央地帯で、其北がツンドラ地帯、南は叢林地帯である。遠古に於いて中央地帯に文化が発生し、ツンドラ地帯に於いて成熟し、今日は叢林地帯にそれが波及しようとしてゐる（三六頁以下参照）。

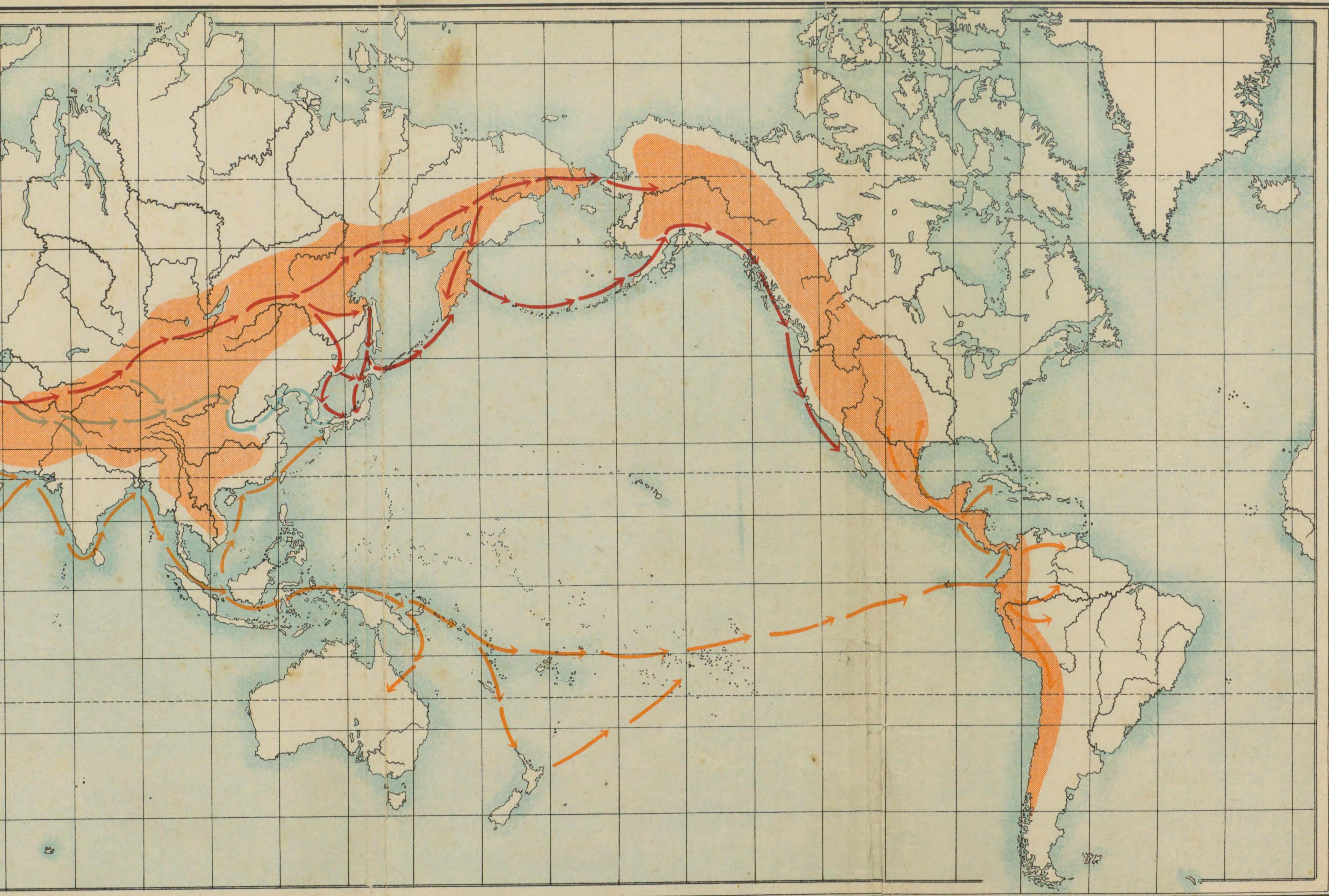
文化單元論の立場から觀れば、世界の文化は本來一つである筈である。従つてそれはいつか、どこからか移動していつたと解しなくてはならぬ。其文化が移動してゆく路線を文化移動線と名づける。私は世界に於ける文化移動幹線を北方移動線、中央移動線、南方移動線の三つとする。圖はそれらを極めて大まかに圖示したもので、赤色線は北方の、青色線は中央の、褐色線は南方の移動線を示してゐる。我日本へはそれらの三路線を通して、シベリヤ、支那、印度の三文化が流入した（四七頁以下参照）。

卷頭圖版 文化地帯及文化移動線圖

地球上に一種の地帯が存在して、そこにそれ／＼特性のある文化が存在するといふ
假定が人類學者キツスラアによつて提供された。圖の茶褐色陰影で示されてゐるのは
中央地帯で、其北がツンドラ地帯、南は叢林地帯である。遠古に於いて中央地帯に文
化が発生し、ツンドラ地帯に於いて成熟し、今日は叢林地帯にそれが波及しようとし
てゐる（三六頁以下参照）。

文化單元論の立場から觀れば、世界の文化は本來一つである筈である。従つてそれ
はいつか、どこからか移動していつたと解しなくてはならぬ。其文化が移動してゆく
路線を文化移動線と名づける。私は世界に於ける文化移動幹線を北方移動線、中央移
動線、南方移動線の三つとする。圖はそれらを極めて大まかに圖示したもので、赤色
線は北方の、青色線は中央の、褐色線は南方の移動線を示す。また、シベリヤ、支那、
印度の三文化が流入した（四七頁以下参照）。

文化地帶及文化移動線圖



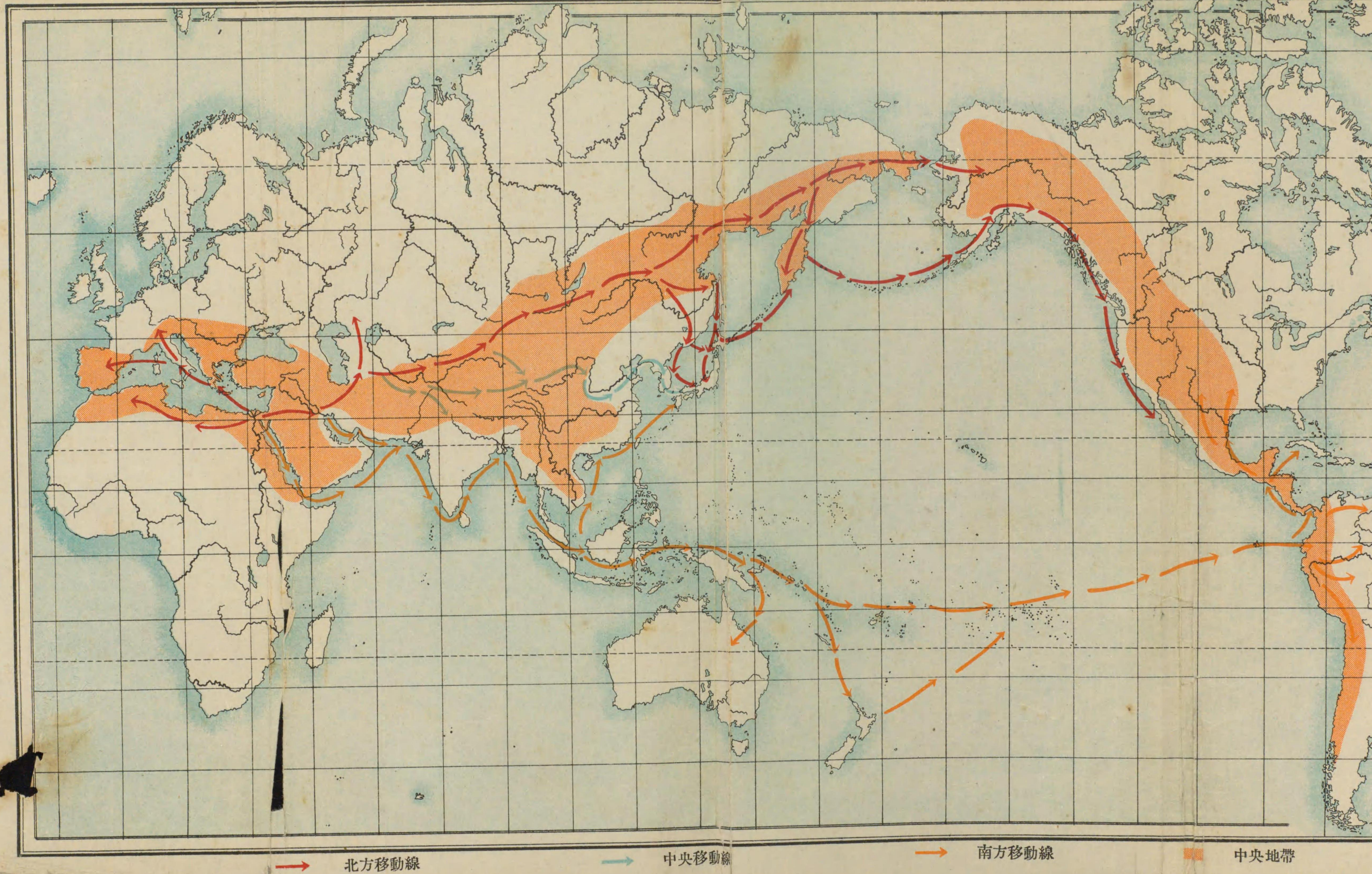
移動線

→ 中央移動線

→ 南方移動線

■ 中央地帶

文化地帶及文化移動線圖



612-11

序 文

在來の日本史を見ると、多くは日本國內の出來事ばかりを叙述して、日本以外のとは殆ど觸れてゐない。まるで日本といふ國が世界と交渉を有つてゐないかのやうに思はれる。しかし、日本だとして特別の國ではなく、日本人だとして特別の人ではない。世界の中の一國である日本、世界民族の中の一民族である日本人を、さうした風に取扱つて來た理由はいくらもあらうけれど、私はそれを主として文化獨立起原説に煩はされたものと観る。

文化獨立起原説は、一國の文化を其國で發生、成長、展開したと観る考へ方で、ちよつと目には如何にも立派らしいけれど、實はけち臭い島國主義、欲張りの帝國主義の觀方であつて、其國家、其民族、其文化が世界に繋がつてゐることを見落してゐるものである。日本の國土は東半球の邊陲に位置してゐるけれど、そこは古代文化の湊合地點であり、日本の文化は島國內で異化したものだけれど、世界文化の粹を多く集めて居り、日本の民族は大方單式人種であると

思はれてゐるけれども、實は黒、黄、白の三大人種の混淆である。日本はかうして其出現以來世界的地位を占めて居り、決して全然孤立した國家ではなかつた。かう考へてこそ、日本の世界史上に占める歴史的地位が高いものとなつて来る。私はかるが故に、日本の地理的及び文化的環境、日本人の人種的要素並びに日本國家の發生的過程を叙述、説明、論評することに努めた。

次に在來の日本史を見ると、其資料は主として文獻であつて、文獻以外のそれは殆ど取扱はれてゐない。然るに文獻の證示するところは狭小であり、殊にその缺けてゐる古代に於いてはどんな歴史的事實の存在も教へてくれる力がない。晩近に於ける考古學の勃興は、遺物を史的研究所の對象に引き入れ、先史時代を闡明した點に於いて其貢獻は大きくないことはないが、それだけではまだ十分とはいはれない。私はそれ故に文化人類學的方法を採つて、言語學、社會學、工藝學、土俗學、其他各文化領域を研究對象とする文化人類學的諸科學の研究成果を憑據として、日本文化の展開過程を還元しようと思つた。のみならず、國土及び民衆については地理學及び體質人類學から材

料を得ようと努めた。實際、さうした多方面の知識を集めて来て、それから事實を綜合、再現して來ることは困難に相違なく、忠實な史學者の中にはさうした態度を否定するものさへもあるけれど、出來るだけ廣い範圍に亘つて資料を求めることは、若し可能ならば望ましいことに相違なく、従つて多少の困難を忍んでも、さうすることによつて眞實に近い史實を把握しようと思つてはならない。私は及ばずながら多くの資料を廣い方面から集めて、それらを分拆、綜合して、あつたままの歴史的過程を還元することに努力したつもりである。

以上の二つは、私が此小著を著すに當つて、特に心を潜めた點であつた。しかし、此書は何も初めから専門家に見せるつもりで書いたものではなく、一般民衆、主として青年學生の一般修養書、或は歴史の教科書、參考書として提供したものであるから、詳細な遺漏のない史實の記述は素より期するところではなく、たゞ日本文化發展の過程を大體に知らさうとしたまでに過ぎない。それにも拘はらず、たゞと參考引用書を並べたのは、中學を出たばかりで教

科書の外多くを知らない青年に、多少とも突込んで日本史を調べてゆく糸口を與へようとしたのである。歴史書には参考書を指示したものがあつたが、一東ねに多數を並べたゞけでは見當がつかない。私は煩雜をも厭はず、初學者に便するつもりで、論述の内容について一々引用参考書を列挙することにした。

一體、日本文化史概論などといふ著述は、學殖も深く、經驗も豊かで、十分自信のある學者がすべきものであつて、私のやうな淺學多忙の貧學徒が試むべき筈ではないのだが、私は早稻田大學附屬高等學院で久しく日本史の講義を受持つて居り、毎年色々草稿を變へて、或年は縦の年代史的に、他の年は横の文化史的に講義をして見た。こゝに私が第一の試みとして上梓した本書は、其後者に屬するものゝ一つで、素より未熟世間に示すほどのものではあるまいが、青年學生諸君のノートに没頭する勞力を省き、いくらでも時間を節約して能率をあげしめたいといふ心から、敢て剗削に附したまでである。總論はともかくも、各論の内容に對する杜撰、粗漏の譏りは素より甘受するところ、他

日機を得たら心ゆくまで刪正したいと思つてゐる。

かうした試みの書物でありながら、これを書かうとした意圖は眞摯と熱誠とに満ちてゐる。そこで、私は嗚呼がましくも、此書を恩師高田博士に獻げて、多年に亘る鞭撻、誘掖の恩を謝し、且つ自らの不攝生から其古稀の賀筵に列することの出来なかつた罪を償ひたいと思ふのである。

昭和五年三月三十日

西村眞次

高田半峯先生に謹んで此書を獻ぐ

半峯先生をおもひて詠める歌の中に

大なるに大講堂は倒れたれど憲法と沙翁の講義尙ほ耳にあり
憲法を緝く毎に偲ばるゝ高田先生の光れるまなざし
憲法の講義聴きつゝ幾度も歴史書かむと我が思ひけり
旅の宿に酒酌みながら聞きければ數々のみさとし身に浸みてあり

内容目次

第一篇 總論

第一章 序論

第一節 文化史の意義……………五

第二節 研究の方法及び材料……………一〇

第二章 環境論

第一節 環境……………一七

第二節 地理的環境……………一八

(一) 日本の位置……………一九

(二) 日本の地勢……………二二

目次

(三) 日本の面積……………二五
 (四) 日本の氣候……………二六
 (五) 日本のファウナ……………二七
 (六) 日本の景色……………三一
 (七) 島地の特性……………三二
第三節 文化的環境……………三五

(一) 文化地帯……………三六
 (二) 文化質……………三八
 (三) 文化圏……………四〇
 (四) 文化移動……………四五
第四節 摘要……………五〇
第三章 人種論……………五四
第一節 天降説話……………五四

第二節 日本人の體質的特徴……………五八

(一) 日本人の頭形示數……………六〇
 (二) 日本人の鼻示數……………六三
 (三) 日本人の身長……………六五
 (四) 日本人の毛髮……………七一
 (五) 日本人の眼形……………七二
 (六) 日本人の膚色……………七三

第三節 日本人の文化的特徴……………七四

(一) 日本人の言語……………七五
 (二) 日本人の物質的特徴……………七七
 (三) 日本人の社會組織……………八〇
 (四) 日本人の技術……………八一
 (五) 日本人の宗教……………八二

(六) 日本人の神話……………八三

第四節 人骨……………八四

(一) 人骨研究……………八五

(二) 人骨研究の結果……………九一

第五節 摘要……………九六

第四章 國家論

第一節 國家起原に關する諸說……………一〇三

(一) 神權國家說……………一〇四

(二) 征服國家說……………一〇七

(三) 契約國家說……………一〇九

第二節 家族國家說……………一一二

(一) 考古學的考察……………一一三

(二) 社會學的考察……………一一六

(三) 工藝學的考察……………一二〇

(四) 土俗學的考察……………一二一

(五) 言語學的考察……………一二六

第三節 宗教國家觀……………一三一

第四節 摘要……………一三四

第五章 時代論

第一節 文化時代と時間時代……………一三九

第二節 先史時代……………一四一

第三節 原史時代……………一四九

第四節 國家成立の年代……………一五二

第五節 摘要……………一五六

第二篇 各論

第六章 言語論

第一節 言語は國の手形……………一六三

第二節 言語の形態と日本語……………一六六

第三節 言語の系統と日本語……………一七〇

第四節 日本語の系統……………一七七

第五節 日琉鮮語の交聯……………一八二

(一) 日本語と琉球語……………一八二

(二) 日本語と朝鮮語……………一八五

第六節 日本語と他國語……………一八八

(一) アイヌ語……………一八九

(二) 支那語……………一九一

(三) インドネジャ語……………一九三

(四) 印度支那語……………一九五

Amami Takohashi

第七節 日本語の變化過程……………一九七

(一) 胎生時代……………一九八

(二) 形成時代……………二〇〇

(三) 文語發達時代……………二〇〇

(四) 混亂時代……………二〇一

(五) 分化時代……………二〇三

(六) 統一時代……………二〇四

第八節 日本語に現はれた民族性……………二〇六

第九節 文字の進化……………二〇九

(一) 進化の段階……………二一〇

(一) 日本古代の文字……………二二二

(二) 眞名及び假名……………二二四

第十節 摘要……………二一六

第七章 宗教論

第一節 神國日本……………二二三

第二節 宗教發生に關する二學說……………二二六

(一) 層位說……………二二六

(二) 等時說……………二二八

第三節 原始神道……………二三〇

(一) 呪と禁忌……………二三四

(二) 占卜……………二四一

(三) 魔法……………二四四

(四) 先宗教と神道……………二四五

(五) 原始神道の特質……………二四八

(六) 近世神道……………二五四

第四節 佛教……………二五五

(一) 佛教の傳來……………二五五

(二) 佛教の弘通……………二五七

(三) 佛教の日本化……………二五九

第五節 儒教……………二六六

(一) 儒教の輸入……………二六七

(二) 儒教の日本化……………二七一

(三) 儒教の神道化……………二七五

第六節 道教……………二七七

第七節 基督教……………二八四

目次

第八節 摘要 二九一

第八章 技術論

第一節 美術國日本 二九八

第二節 固有技術の形成 三〇〇

(一) ツングース族の適應性 三〇〇

(二) 繪畫 三〇二

(三) 彫刻 三〇六

(四) 音樂 三〇七

(五) 金屬細工 三〇七

(六) 石細工 三一一

第三節 外來技術の吸收 三一二

(一) 大陸藝術輸入の徑路 三一三

(二) 飛鳥時代藝術 三一七

(三) 寧樂時代藝術 三一九

第四節 自主技術の發生 三二八

(一) 弘仁時代 三二九

(二) 藤原時代早期 三三二

(三) 藤原時代晚期 三三八

第五節 支那技術の影響 三四二

(一) 建築の五様式 三四三

(二) 彫刻 三四八

(三) 繪畫 三五〇

(四) 工藝品 三五二

第六節 同化技術の爛熟頽唐 三五四

(一) 墨繪の勃興 三五五

(二) 建築庭園術の展開……………三五七

(三) 茶人趣味の發生……………三五九

第七節 英雄的藝術の昂揚……………三六一

(一) 城郭建築の發達……………三六三

(二) 建築的彫刻の進歩……………三六五

(三) 狩野派の三大畫家……………三六六

(四) 能樂の盛行と能面……………三六七

第八節 島國的技術の醗釀……………三六九

(一) 日光廟の建築……………三六九

(二) 演劇の成長……………三七〇

(三) 浮世繪の發達……………三七三

(四) 根付の流行……………三七八

(五) 江戸趣味の成立……………三七八

第九節 世界的技術の渾成……………三八六

第十節 摘要……………三八八

第九章 經濟論

第一節 經濟史的段階……………三九八

第二節 自足經濟時代……………四〇〇

(一) 經濟生活の三大特徴……………四〇〇

(二) 生産過程及び消費過程……………四一三

(三) 社會の組織及び階級……………四二一

(四) 土地制度……………四二六

第三節 商業經濟時代……………四三〇

(一) 班田制時代……………四三一

(二) 莊園制時代……………四四三

(三) 知行制時代……………四五五

(四) 領地制時代……………四六二

第四節 工業經濟時代……………四七五

(一) 江戸時代……………四七六

(二) 東京時代……………四九六

第五節 摘要……………四九九

第十章 結論……………

第一節 論述の總收……………五一〇

第二節 日本文化史の示標……………五一四

圖版 目次

卷頭圖版 文化地帯及文化移動線圖……………卷頭

第一圖版 古代建築と古代衣服……………七八—七九

第二圖版 縄文式土器と彌生式土器……………一一—一三

第三圖版 江戸灣海岸線進出圖……………一四—一四三

第四圖版 兩大陸週期的氣候變化圖……………一四六—一四七

第五圖版 沖繩の結繩と南部繪曆……………二〇—二二

第六圖版 原始的標繩とシベリヤの女巫……………二四〇—二四二

第七圖版 十七世紀の鹿兒嶋と南蠻寺の説教……………二八六—二八七

第八圖版 飛鳥文様系列圖……………三三八—三三九

第九圖版 寧樂文様系列圖……………三三八—三三九

第十圖版 古代の稻實と豎穴……………四〇六—四〇七

日本文化史概論

早稻田大學教授

西村眞次著

第一篇 總論

第一章 序論

第一節 文化史の意義

私は茲に日本文化史を其文化領域に従うて極めて簡単に論述する、しかし論述しなければならぬ要點には一々觸れるつもりである。明治以前の日本歴史は甚だしく非科學的で、一種の物語に過ぎないやうなものであつたが、明治時代に科學が勃興して以來、それもまた科學的に研究せられることになり、舊套的、神話的、封建的要素がいくらか驅逐せられた傾きがあるけれど、今尙ほ偏つたところが少からず残つて居り、真正の史學的性質を帶著するに至らないのは遺憾である。在來史が重點を政治及び軍事に置いたことは、觀察の基礎を國家に据ゑたからであつた。しかしながら『無國民則無國家』(No nation, no state)の警句をして眞ならしめば、國民の發達に重を措くのが國家の歴史

の本来形でなくてはならない。

かうした新意義の歴史を私は文化史と呼ぶ。文化史とは一言にして之を蔽へば、民衆の生活様式の進化過程である。生活様式とは社會、言語、工藝、土俗を含むところの文化的諸要素と、主として人種を指すところの體質的要素とから構成せられる共同習俗である。生活様式は圈を有つ。圈には大小があり、大にしては人類、人種、國家、小にしては村落、家族といふ風に、他と異つた共同習俗を現はしてゐる。こゝに文化史の全分の區別が生ずる。人類總體の文化史を取扱ふものは世界史(Universal History)であり、或民族の文化史を取扱ふものが民族史(National History)である。人類と民族との關係は、全と分との關係に過ぎないが故に、世界史と民族史との關係も全分の差異に過ぎないものであり、どんな民族史も世界史から離れて其存在が許される筈がない。共同習俗はまた要素を有つ。それらの要素は幾様にも分けるとが出来るが、普通には社會、言語、工藝、土俗の四つとせられる。それらを全幅的に取扱ふ場合、それを私達は一般史(General History)と呼び、それらの各個を取扱ふ場合、それを

特殊史(Special History)と呼ぶ。これもまた全分の關係に過ぎない。故に日本文化史とは、日本民衆の生活様式の歴史であるといふことが出来る。即ち日本文化史は、文化圈に於いては日本國家に限定せられて居り、文化質に於いては日本民衆全體の共同習俗を取扱ふものであつて、それが世界文化史の一部であることはいふまでもない。

普通には文化史と文明史とは混同されてゐるが、文化史が文明史と異るところは、前者が包括的なるに反し、後者が選擇的なることである。文明とは同時代に於ける高級文化の意義であつて、文化の一部分である。文化の中最も價値に富んだものを抽出したのが文明である。故に文明は文化の一部であり、文化は文明を包括することになるのである。文化史は民衆の全生活史であり、文明史は國家に對する民衆の關係の歴史である。在來史は眞正の文明史に到達する過程の中にあるもの、或は邪路に陥つたものと見てよい。民衆の國家に對する交渉は、素より民衆生活史の一部であるけれども、決してそれを全生活と見做すことは出来ない。然るに國家を以て社會生活營爲の最高

級形式であるといふ僻見から、それを代表文明であると思つた人々によつて政治的軍事的歴史が尊重せられ、文學的藝術的歴史が重視せられ、經濟的財政的歴史が過重せられたのである。事實上、それらはいづれも生活諸現象の部に過ぎない。私達はこれら諸現象を包括したところの文化形態を把握したい。

私達の考へでは萬物は一系であり、生命は連續してゐる。それは私達の尙ほ未だ十分に知り得ないところの法則——進化の法則によつて不斷の變化を續けてゐる。不斷の變化は即ち進化である。此進化こそは、私達が歴史と呼ぶところのもので、自然界の進化を取扱ふものは自然史であり、精神界の進化を取扱ふものは文化史である。文化史の領域は極めて廣いが、サルカル教授も指摘した如く、人類の努力は、近世に至つて、それの中から法則を發見したものの、みを引き出して、それを文化科學と稱してゐる。政治史からは政治學が成り立ち、經濟史からは經濟學が成り立ち、又文學史からは文學、藝術史からは藝術の科學が構成せられようとしてゐる。文化科學は結局歴史である。

これ歴史が科學である所以、叙述及び法則の學問である所以である。

かうした見地からいへば、日本民衆だとしても人類の一部であつて、人類の進化の法則から離れた特別な生活様式を有し得るわけがない以上、大體に於いて世界史の過程を歩む筈であるが、諸種の動因、たとへば地理的環境、社會的環境などから、少しづつゝの變異を生じてゆくの、それを把握しようとするところに重點が置かれる。日本文化史は此意義に於いて、日本民衆の生活様式の特異點を知り、それを世界人類の生活様式に比較することを主眼としなければならぬものであるといふ結論に到達する。

大にしては人類、小にしては民族の目的は、一部一局の人々の文化を向上せしめることではなく、總體を進歩せしめることである。民族史の職分は、民族總體の進歩過程を知つて、其進化の傾向がいづれに走つてゐるかを瞭示することである。現在が過去の堆積である如くに、將來は現在の堆積であるであらうことが推論せられる以上、民族史は所謂『溫故知新』の原理によつて、現在及び將來を過去の證據によつて照射する任務を帯ぶるものといふことが出來

る。
理窟からいへば歴史はかうした大任務を有つてゐるが、私が今こゝに講じようとする日本文化史に於いて、果してどれだけのものが成し得られるであらうか。たとへ、指導的、決定的、教訓的地位を占められないまでも、先驅的、暗示的、刺戟的ではありたいと思つてゐる。若し此小著が讀者諸君の知識をいくらでも増す動機になるならば、私はそれで十分満足する。

第二節 研究の方法及び材料

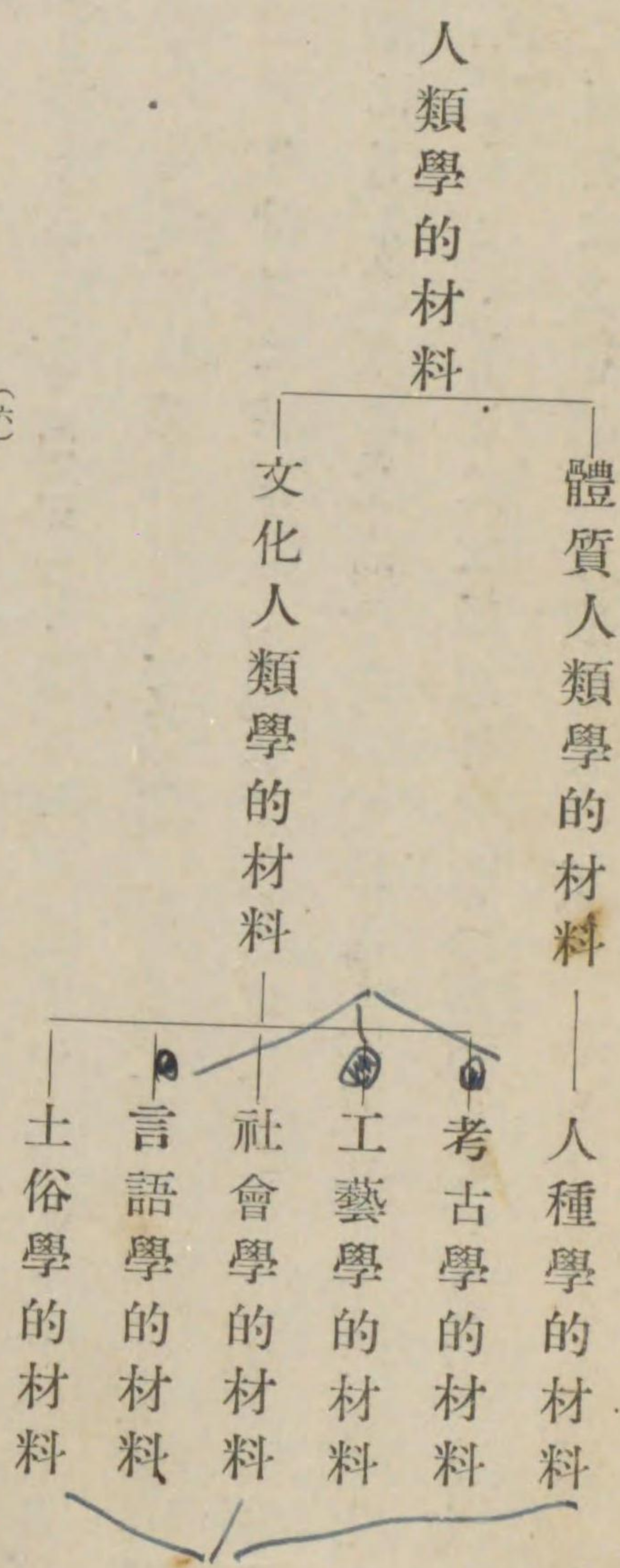
史學の概念は遠古以來色々變遷し、今日でも學者によつて其考へ方が異つてゐるが、現下に於いて最も普通に行はれてゐるのは、史學は文化科學に屬し、自然科學とは異つてゐる。自然科學は規範的であつて一般法則を發見するに反し、文化科學は記述的であつて、個別的認識を主とするといふ風の考へ方である。

しかし、私達の考へでは、歴史には法則がないといふのは、まだそれが十分發

見せられないからで、自然の分である人類の生活に特殊の法則があらう筈はない。私達が個々の歴史的事實の認識以外に、それらがどうして起り、どうした影響を與へたかを知らうとするのは、既に單純な歴史的事實の記述ではなくて、それらに因果關係を求めようとするものである。因果關係は即ち法則の所産である。

そこで史學の研究法の問題が起る。私は史學の研究は生物學的方法(五)に由るべきであると思ふ。しかし人類は生物の中でも最も高尙複雑な生活を營爲して居り、特にそれを専門に研究する人類學が成立してゐるから、人類學的方法 (Anthropological Method) を採るのが最適であると思はれる。

次ぎに起るのは研究材料の問題である。在來の歴史、殊に日本歴史にあつては、其研究材料は甚だしく偏局せられ、單に文獻の一側に偏してゐた。然るに文獻は日本民衆の生活の全部ではなく、其一部を現はすところの渣滓に過ぎない。そこで、私達は文獻以外に他の材料を多く求めなくてはならぬ。それらの材料は人類學の分類に従つて、



とすることが出来る。^(六) 在來、唯一の材料と考へられてゐた文獻の如きは、言語學的材料の一部分に過ぎないものである。また近頃やかましくいはれてゐる遺物の如きも、考古學的材料に過ぎない。私達はそれら以外、尙ほ多くの前掲材料を蒐め、それらから真正の歴史的事實を還元しなくてはならない。

(一) 人種學的材料 (Ethnological materials) は主として、日本民衆の人種的地位を知る爲めに求められるのであつて、其體質を調査してそれを世界民衆、特に近周民衆のそれに比較する材料とする。此種の方法では化石は勿論、現在の生態が役立つ。たとへば頭形、身長、毛髮、膚色など、人種を規定する體質的規準

を求めることによつて、日本民衆が何人種に屬するかを知る。在來の日本史では、日本民衆の人種的地位が明らかになつてゐない。

(二) 考古學的材料 (Archaeological materials) は近頃大分着目せられ、特に先史時代史に於いてはそれが尊重されてゐる傾きがある。しかし、單に先史時代のみならず、歴史時代に於いても文獻以外に遺物が参考せられねばならぬ。これらの材料は所謂『遺物』(Relics)、『遺跡』(Sites)にあつて、石器、土器、古墳は勿論、一切の工藝品、繪畫、彫刻などは皆此中に含まれる。文獻のない時代の民衆生活は、單にこれらのものに現はれてゐるだけであるから、これらを措いてはそれは求められない。文獻以後でも、それに現はれないものが、これらによつて闡明せられることが多い。考古學的材料は、普通に、先史的 (Prehistoric)、原史的 (Proto-historic)、歴史的 (Historic) の三つにわけられ、第一は文獻のない時代、第三は文獻のある時代、第二は其中間の時代、即ち神話時代のもの、をそれらに所屬せしめてゐるが、いづれも史實の認識綜合には重要な役目を有つてゐて、敢て文獻と異るところはない。けれども、文獻がなく、此外にはどんな證據もない先

史的材料は、中でも最も重要であるといはなければならぬ。

(三) 工、藝、學、的、材、料 (Technological materials) は、考古學的材料と同じく、それによつて民衆の生活技術の變遷を知る爲めに役立つが、彼れは遺物を材料とするに反し、此れは殘物 (Survivals) を材料とする點が異つてゐる。遺物は過去に於いて用ひられ、今は地下に埋まつて生命を失つたものであり、殘物は過去に於けるが如く現在に於いても用ひられてゐる人類の製作である。

(四) 社、會、學、的、材、料 (Sociological materials) は、日本民衆の衆團生活を痕づける爲めに役立つもので、史料としては極めて重要性に富んでゐる。これらは殘物としての地方慣習などに、貴重材料が多く保存せられてゐる。

(五) 言、語、學、的、材、料 (Linguistic materials) は、殘物である現在の日本語や、記録されて遺物となつてゐる記録、古文書などを指すのであつて、殘物では言語慣習 (Linguistic Custom) を主とし、遺物では文獻 (Documents) を主として取扱ふ。

(六) 土、俗、學、的、材、料 (Ethnographical materials) とは、神話、宗教、科學などに關する材料であつて、主として民衆の精神生活を還元するのに役立つ。それらは勿

論文獻にも現はれてゐるが、比較的多く地方の習俗に残存してゐるから、それらを蒐めることが大切である。

以上、私は六種の歴史的材料を挙げたが、それらの史學的價值は固より等價的であつて、決して甲乙の間に優劣はないが、所要の主題に關係のあるなしによつて、若干の軒輊があることはいふまでもない。^七

かうした廣い意味に於いての史料を漁ることによつてのみ、眞正の日本民衆の文化の發展が痕づけられて來る。在來のやうに文獻ばかりにかぢりついでゐるは、民衆生活のほんの一部分しか知られない。新しい史家は出來るだけ多角的、多側的に研究材料を求め、それらを分析し、然る後に、綜合するによつて、あつたまたまの歴史的事實を還元する態度に出でなければならぬ。^八

引用參考書

(一) 野々村戒三、史學概論、一五、六、七、一六頁參照。野々村教授は此書に於いて史學を定義して、『史學は社會的生活體として様々に活動する人間の發展の諸事實を、價値

關係を離れざる心的物的因果聯絡に於て探究、闡明し、且つ表現する科學である。』といつてゐる。これ史學の研究對象が人間の社會的活動を主體とするを容認するもので、民族史の場合には民族生活が其取扱の眼目であることを峻示する。

- (一) cf. Clark Wissler. *Man and Culture*, pp. 1, 2
- (二) 羽仁五郎轉形期の歴史學、四七頁以下參照。本書は特に日本に觸れることが多いので、興味が深く、且つ峻示されるところが少くない。
- (三) Benoy Kumar Sarkar. *The Science of History and the Hope of Mankind*, p. 8 ff.
- (四) 丘淺次郎、猿の群から共和國まで、六頁以下參照。
- (五) A. C. Haddon. *History of Anthropology*, pp. 4, 5.
- (六) 西村眞次、人類學汎論、二〇頁以下及び三七頁以下參照。
- (七) 坪井九馬三、史學研究法、黑板勝美、國史の研究總論の部參照。これらの書は、歴史の研究は文獻以外に出で、材料を廣い範圍に求むべきことを説いてゐる。註(一)に示した野々村教授の著書は、方法學に於いて特に精しく、材料の點でも痒いところへ手が届くやうに説明されてゐる。しかし、こまかく分けてゆけばゆくほど、分析の方法はよくわかるが、反對に綜合の方法はわかりにくくなる。著者がそれを引括めて、人類學的方法と名づけたのは、主として此理由に基づいてゐる。

第二章 環境論

第一節 環境

人類は自然の一部であるが故に、それは自然を離れて生存することが出来ない。初め一つであつた人類をいくつにも分岐せしめて、謂ふところの『人種』を作り出した動因は、それを圍繞するところの自然であつた。かうした意味に於ける自然を、人類學者、史學者、地理學者、社會學者らは呼んで環境(Environnement)といふ。環境はもと周圍(Surroundings)ともいはれ、フランス語では「milieux」と呼ぶものに相當する。生物學者らは自然の動因に重きを置く結果、環境を自然に限らうとする傾きがあるに反し、社會學者らは人類の營爲を輕んじない結果、環境を自然以外に求めて、文化をもそれに加へようとする傾きがある。文化は人類に於いて他の生物に優越した作爲を出現したが故に、

生物學的にもそれを認識しないで置く譯にはいかないと思はれる。在來、自然的環境といはれたものは、重に地理的環境に限られてゐたが、それに文化的環境を加へれば、環境は二つの種類から成り立つわけである。即ち

一、地理的環境 (Geographical Environment)

二、文化的環境 (Cultural Environment)

の二つである。前者は第一次的のもの、後者は地理的環境に育まれた二次的のものである。あらゆる民衆、あらゆる民族の歴史的過程は、皆これらの二環境から影響せられて、其特異性を有つことになつたのであるから、民族史に於いてはこれらを除外しては何事をも考へることが出来ない。

日本文化史に於ける環境は、かるが故に、日本の土地、日本の文化の二つを計へることが出来る。以下、簡単にそれら二つの環境について述べることにする。

第二節 地理的環境

民族生活は過去に於いて地理的環境に依存した。將來に於いては或は之を超越することが出来、或は一部分之を制限することが出来るかも知れないけれど、古代に溯れば、溯るだけ地理的制限を受けて來たことは事實だ。こゝに於いて、あらゆる史學者は、先づ土地 (Land) を其學的構成の先決問題として取扱ふことを常とする。『土地』は即ち地理的環境に匹敵するものである。ここでは地理的環境を主として論ずるが、其中に包含せられる問題は、少くとも、一、位置 (Location)、二、地勢 (Configuration)、三、面積 (Area)、四、氣候 (Climate)、五、動物區 (Fauna)、六、景色 (Scenery) の六つを計へ上げることが出来る。

これらはいづれも相對的のもので、獨立的には存在しないものであるが、便宜の爲めにかうした分け方をしたのである。今これらの一々について、簡単に説明して見ようと思ふ。

(一) 日本の位置

我日本の位置は色々の手段で説示することが出来る。最も通俗的に分り易くいへば、日本は東半球の東端に位し、大陸を離れて、太平洋中に孤立する群

島と大陸から突出する半島とから成り立つ帝國であると叙述することが出来る。或中等地理教科書の説明を借りて來ると、『我國はアジャ大陸の東邊に沿つて、約四千七百キロメートルに亘る日本列島と、大陸から突出して長さ八百キロメートルに及ぶ朝鮮半島とから成つてゐる。日本列島は三つの弓形を作つて、北東から南西に連り、内側はオホーツク海、日本海、東支那海を挟んで、アジャ大陸と離れ、外側は廣い太平洋を隔て、遙かに兩米大陸及び大洋洲と相對してゐる。朝鮮半島は大陸の東部に出で、日本海と黄海とを分け、列島との間に狭い朝鮮海峡を挟んで、我本土と大陸との橋梁をなしてゐる』といふことが出来る。

昔、算數がまだ十分に發達しなかつた時、距離を云ひ現はすのに里數を以てせず、日數を以てしたことがあつた。たとへば『魏志』の倭人傳を見ると、『帶方郡(朝鮮沙利院附近)から海岸に従うて水行し、韓國を歴て乍ち南し、乍ち東し、海峡の北岸狗邪韓國(伽耶、即ち金海)に至るのは七千餘里である。そこから千里の海を渡ると對馬國で、また南の方の海千里を渡ると一支國(壹岐)で、そこから

また千里の海をも一つ渡ると末盧國(松浦)である。末盧から東南へ陸行すると五百里で伊都國(怡土)、東南へ百里行くと奴國(難)、更に東行すると不彌國(宇見)で、そこから南方の投馬(妻)に至るには水行二十日、陸行一月を要する』といふ風に表現されてゐる。

然るに若しアメリカから日本を見たらどうか。如上の表現法を採つて、日本を愛し、日本を戀し、一生を日本の紹介に獻げて死んだ故グリフィス博士(W. E. Griffis)は、其著『歴史、神話、及び技術上の日本』(Japan in History, Folk-lore and Art)で、次ぎのやうにいつて日本の位置を説明した。

“Where is Japan and how does it lie on the surface of the globe? With the aid of the steamship and railway, we may answer by saying that Fuji Yama is about sixteen days from New York, or twelve from San Francisco. Or, from the other point of view, we may say that Japan lies in the Pacific Ocean east of China and Korea, in latitude between New-foundland and the West Indies; that is, the Japanese climate is very much like our own.” (『ここに日本があるか、どんなにそれは地球上に横はつてゐる

か。汽船と汽車との助けを借りたならば、フジ山はニューヨークから約十六日、サンフランシスコから十二日程であると答へることが出来る。また他の點からいへば、日本は支那及び朝鮮の東に當る太平洋中に泛び、緯度はニューヨーク、ファウンドランドと西印度との間に亘つてゐるから、日本の氣候は米國と大部分同じだといふことも出来る。』

もつと簡單にもつと精確に日本の位置を示す方法は、經緯度を用ひることである。即ち『日本は北緯五十度五十六分(千島の阿頼度島北端)に起つて、二十一度四十五分(臺灣の七星岩南端)に終り、東徑百五十六度三十二分(千島の占守島東端)に起つて、百十九度十八分(澎湖諸島の花嶼西端)に終る四極を有つた國である』といふことが出来る。かうした表現は、大陸の或地點を指す時には、ほぼ其面積を指示することが出来るので適當であるけれども、日本のやうな島國を説明するには都合がよくなる。

(二) 日本の地勢

次ぎに地勢の上から日本を見ると、古代日本人が自分達の國を『大八洲國』

と呼んだ通り、六大島、二列島、二群島、一半島から成つてゐる。汽車に乗つて青森から下關まで往つて見て分る通り、日本には平原といふべきところが殆どない。山でなければ海、海でなければ山といふのが日本の地勢である。

地理學的表現を用ひると、日本列島を構成する主要山脈は、北彎、南彎の二山系で、北彎山系は北東部の地帯を、南彎山系は南西部の地帯をなしてゐる。前者は三列に分れて、關東山脈から蝦夷山系を経て樺太に連なる外帯と、阿武隈北上の兩山脈を連ねる内帯と、奥羽山脈、出羽丘陵、北海道及び樺太の西部に亘る山地とを連ねる第三列とを出現せしめてゐる。後者は赤石、紀伊、四國、九州の諸山脈から琉球を経て臺灣に至る外帯と、飛驒、木曾の兩山脈から近畿の地壘を経て、中國山脈、筑紫山脈に連なる内帯との二列に分れてゐる。外帯は地勢が高峻であるが、内帯は地盤の烈しき變動を受け、また著しき浸蝕を受けた爲めに、地壘と盆地とに富んでゐる。北彎山系の連亘する地域を『北日本』と稱し、南彎山系の連亘する地域を『南日本』と稱し、彎形の外側を『表日本』、内側を『裏日本』と呼ぶ。北日本と南日本とに列島を分ける分界點は富士火山脈で、

そこでは南北兩彎山系が相會して、本州中で最も幅の廣い地域を構成してゐる。富士火山脈以北には那須、千島、鳥海などの火山脈があり、以南には阿蘇、霧島、白山、大屯などの火山脈があつて、多くは列島の内側を走つてゐる。

朝鮮半島の構造は日本列島と異り、其脊梁は火成岩から成る高原狀の山地で、南部には大白山脈と小白山脈とが連り、北部には長白山脈、妙香山脈、狼林山脈が連つてゐる。一體に火山が少く、活火山は一つもない。

かうした地勢を有つてゐる日本(朝鮮半島を除く)は、これを火山島(Volcanic islands)だといふと出来る。火山島であるが故に、其地勢は山岳的(Montanic)であり、同時に島の地的(Insular)であり、従つて海洋的(Oceanic)である。山岳的であることは、平野と湖沼との少いことを示し、長い河川の多からぬことを示すものである。これを引括めて觀れば、日本の地勢の特質は島國性(Insularity)を有つてゐるといふことになる。

日本列島をして島國性を有たしめる第一の因子は、それが海岸線(Coast line)に富んでゐることである。日本列島の延長は約四、七〇〇キロメートルであ

るのに、其汀線の延長は約二九、七〇〇キロメートルある。これは汀線が屈曲に富み、従つて港灣多く、航海と漁業とに恵まれた地勢を有つたことを示すものである。此天然の恩恵を利用して、其富を開發することに努力するのは、日本民族に課せられた大きな第一義務である。

(三) 日本の面積

第三に日本の面積を見ると、緯度は二十九度十一分、經度は三十七度十四分の廣がりをもつにも拘はらず、地勢が平野的でなく、島國的である爲めに、面積は比較的少ない。日本帝國の總面積は約六十八萬方キロメートルであるが、これを六大島、一半島に分けると、

本州	三三、〇〇〇(方軒)	一四、五〇〇(方里)
朝鮮	二一、〇〇〇	一四、三〇〇
北海島	七九、〇〇〇	五、一〇〇
九州	三六、〇〇〇	二、三〇〇
樺太	三六、〇〇〇	二、三〇〇

臺灣	三六、〇〇〇	〃	二、三〇〇	〃
四國	一八、〇〇〇	〃	一、一五〇	〃
合計	六〇、〇〇〇	〃	四、四〇〇	〃

といふ數字を示してゐる。これを世界の總面積一億四千四百十二萬四千方キロメートルに比較すると、約二百十二分の一に當る。日本は決して大面積を有つた國といふことは出來ない。こゝから日本民族は自分達の爲さねばならぬ仕事の性質を悟得する責任がある。

(四) 日本の氣候

第四に日本の氣候を窺つて見ると、日本列島の延長は四、七〇〇軒あり、緯度に於いて二十九度十一分の長さを有つてゐるので、極北と極南とでは寒暖の度が非常に異り、年平均氣温は臺灣及び小笠原島では二十度以上を示し、北海道、樺太では九度以下、樺太の一部は零度以下を示してゐる。年平均二十度以上は熱帯、零度以下は寒帯、其中間は溫帯とすれば、日本帝國の領域内は寒、溫、熱の三帯に亘つてゐるといふことが出来る。これら氣温の差異は(1)地形、(2)地

勢、(3)海流、(4)季節風等に影響せられる結果であるが、大體に於いて日本の氣温は溫和であるといふと出来る。それは北方からは寒流が流れ來り、南方からは暖流が流れ來つて、溫度を調節することが多いからである。いはゞ日本は寒さと暑さとの衝突地點で、其地勢の爲めにフロラ及びファウナも寒帯と熱帯との中間を見てゐる。

(五) 日本のファウナ

次に日本のファウナについて述べることにする。相模の三崎に臨海實驗所があるが、其近海では溫帶的の生物は勿論、寒帶的の生物、熱帶的の生物も取れ、それが爲めに研究が非常に便利なので、外國からも多くの學者が來て研究に従事するといふ有様である。三崎はいはゞ日本の縮圖であつて、そこに代表せられるが如く、日本の動物區は主として溫帶的であるが、北方に於いては寒帶的、南方に於いては熱帶的の性質を具有してゐる。動物の中で最も人類に近い關係のあるのは脊椎動物(Vertebrata)であるが、それが日本に幾種棲息してゐるかを見ると、

種	類	世	界	日	本	比	率
魚類 (Pisces)		12,000		2,500		20.88	
鳥類 (Aves)		20,000		618		3.90	
哺乳類 (Mammalia)		7,000		197		2.81	
爬虫類 (Reptilia)		6,000		103		1.72	
兩棲類 (Amphibia)		2,500		50		2.00	

といふ割合で、日本種の世界種に對する比率は、魚類が最も多く、兩棲類之に次ぎ、鳥類、哺乳類、爬虫類といふ順序で次第に減じてゐる。日本の面積は世界の二百十二分の一に過ぎないのに、魚類は二〇・八三パーセント、兩棲類は二〇・〇〇パーセントの多數を占め、種類の最も少い爬虫類に於いてすら世界の五十分の一、哺乳類は三十五分の一、鳥類は三十二分の一を示してゐる。かうした風に脊椎動物の種の多いことは、脊椎動物中の哺乳類に屬する人類もまた種に富んでゐるべきことを暗示するものである。渡瀬理學博士は曾て人生動物學の上から、此理由を原求して(1)氣候に變化のあると、(2)降雨量の多いと、(3)土壤が肥沃であると、(4)地貌が様々であると、(5)動物の發源地に近いとを計へ

上げた。これらの五動因は相互に關係のあるものであるが、これらの中(1)と(4)とは既に説いたから、其他のものについて極めて簡単に説明しよう。

降水量は大正十五年、昭和元年度の統計に依ると、同年の最大は二、八八五ミリメートル(高田)で、最小は五七八ミリメートル(松本)である。大小の差は可也に甚だしいけれども、總體からいへば高知、潮岬、八丈島などの南海岸及び敦賀、金澤などの北陸沿岸は二千ミリメートル以上であり、本州中部、東北地方、北海道内地などは千ミリメートル以下であるが、それを大陸の降水量に比べると、決して少い方ではない。降水量が多いと草木が繁茂し、草木が繁茂すれば動物が孳殖し、動物が孳殖すれば人類も繁榮するのが通則である。

次に土壤の肥瘠は種々の原因から結果するけれど、大體に於いて島國は岩石が礫角であるのが普通である。我邦も地勢が山岳的であるけれど、處々に河川によつて運搬せられた沖積土が小平原をなして、面積の割合に、耕地が多い。地味は必ずしも肥えてはゐないけれど、またこれを瘠せてゐるともいはれない。降水量が多い爲めに、水稻の耕作には適してゐる。南方と北方と

ではフロラに大分の差異があるが、概して温帯的である。従つてファウナも温帯的であるが、南北兩方の生物がこゝでかち合つて、南方では藪林地帯を見、北方ではツンドラ地帯を見る。

最後に動物の發源地との關係を窺ふと、東印度諸島を包圍する南太平洋は暖帯水族の發源地、オホーツク海附近は寒帯水族の發源地であつて、其兩方から日本近海に向つてそれらの水族が移動するから、前述の如くに魚類の種が多いのである。また陸棲動物の發源地はアジャの中部であるが、日本は曾て大陸の一部をなしてゐたから、それらの日に我邦に多くの陸棲動物が移住した。かうしたわけで、世界に比して我邦には脊椎動物の種が多いのである。

脊椎動物の豊富な種が我邦に發見されることは、やがて日本に人類もまた豊富な種を保存し、それを繼續せしめる力のあることを示すものでなくてはならない。大正十四年十月一日の人口調査に於ける人口は、

内地	三〇,〇三,一〇九	三九,七三,七三三	五九,七三六,八三三
朝鮮	一〇,〇一〇,九四三	九,五五〇,〇〇一	一九,五三三,九四五

臺灣	二,〇五三,六六九	一,九四〇,七三九	三,九三三,四〇八
樺太	一三三,三七九	八一,三七五	二〇三,七五四
合計	四二,一〇九,一〇〇	四二,三四七,八三九	八三,四五九,九三九

であつて、平均女一〇〇に付き男一〇二・三の割合を示し、一方里に於ける人口の密度は一、九〇九である。其増加率は大正九年以來累年増加の傾向があり、九年には一〇・七八、十年には一二・三七、十一年には一一・八四、十二年には一二・二六、十三年には一二・五七、十四年には一四・六五、昭和元年には一五・六〇を示してゐる、いづれも人口千についての差増である。假りに大正十四年の人口八千三百四十五萬九千九百二十九人が一五六〇の増加率で増殖するとすれば、百三十萬一千九百七十四人餘を増して、翌昭和元年には八千四百七十六萬一千九百〇三人になるわけである。かゝした人口増加は、帝國內の生活を實際に不可能ならしめるといふので、識者の間には色々の對策が講ぜられてゐる。

(六) 日本の景色

日本の國土は、前述の如く、地勢が様々である爲めに、山の崎嶇と海の廣濶と

が相對照して美しい空間を作つてゐるのみならず、水蒸氣が多い爲めに、春は霞となり、夏は驟雨となり、秋は霧を漂はし、冬は雪を降らして、自然の景色に變化あらしめる。また動植物が多い爲めに、春は花咲く林に鳥が謳ひ、緑の野邊には蝶が舞ひ、夏は卵の花垣に杜鵑の聲を聞き、秋は夕日に映ゆる紅葉輝かしく、蘆荻の白い穂を抽く江畔に雁や鴨の遊ぶのを見る。冬は晩菊に霜白く置き、野山に雪降つて銀世界の眺めが美しい。人類は單に必要を充たす經濟生活のみを以て満足するものではなく、他に耳目を娛ましむる享樂があつて、うるほひのある審美生活を營むことが出来る。かうした日本の光景が、日本民衆をこゝに牽きつけて、こゝに定着せしめ、こゝを愛せしめた大きな吸引力となつたことはいふまでもない。民衆移動の動因には、驅逐(Expulsion)と吸引(Attraction)の二つ⁽¹⁰⁾あるが、日本の場合には、吸引が、民族移動の一大動因となつてゐた。

(七) 島地の特性

ウェリスの考へによれば、島地の生物は祖型から孤立分離する代りに強敵

から免れて、よく其種を保存し、どうかすると新種を形成する傾きを有つてゐるといふ⁽¹¹⁾。日本人が黒、黄、白、三系の人種から構成せられ、今日に於いては其祖先をすら見出すことが困難になるまでに混淆し終つた一方、祖先によつて建てられた國家を原始形に於いて現在にまで繼承扞護し來つたのは、全く其環境が島國性(Insularity)に富んでゐたからである。其人種構成、國家發展の歴史に於いて、日本が英國とよく似てゐるのは此理由に基づくのである。周匝する水の爲めに、大陸の壓迫から免れて、島地が防護に利あるとは地理學者フェッセルも力説したところである⁽¹²⁾。

しかるに、こゝに戒心すべき一學説がウィリス博士(J. O. Willis)によつて提唱せられた。彼れは其近著に於いて種と屬との地理的關係を自然淘汰の法則から考察して、次ぎのやうな五項の結論に到達した。

(イ) 種の世界に於ける分布は、一般に迅速なものであつた。

(ロ) 種や屬の世界に於ける現在の分布は、それらの種や屬に取つて可能な最大限を現はすものである。それ故に分布は一段落を告げたものである。

(六) 現存する種と屬とは、原則として彼等の生存するのに適した場所を占領してゐる。

(七) 小地域を占領してゐる種と屬とは、通則としては死滅しつつある種と屬(殘物)である。自然淘汰は非常に狭小な地域に彼等を作つて、そこを大多數によつて占領させるやうなことは出来なかつた。さうした場所には、また可也多數の瀕死の形のものがあるべき筈だ。それ故に、これらの地方化した形式は、死滅すべきものだとして假定せられる。

(八) 同一の理由で、種を多く持たぬ小さい屬は、總體的に觀れば、殘物としてまた死滅の過程にあるものとして考へられなければならない。^(三)

ウイリス博士は適者殘存の法則から割り出して、小地域にしか存在しない種屬を死滅の過程にあるもの、大地域に存在してゐる種屬を生存に適した土地を占領して繁榮してゐるものと見たのである。ウエリスが指摘し、フェッヅルが指摘した如く、古代に於いては島地が大陸から孤立してゐた爲めに自己を扞護する便益があつたけれど、文明の進歩は機械力によつて島地の本來

性質である『扞護力』を破壊してしまつた今日、『殘存』に過ぎない種屬の繁榮を島地に求めようとすることは、ウイリスの筆法でゆけば困難なことである。ウイリスの結論の第四項は日本文化史の過去を説明すると共に、將來を豫示するところの警鐘でもあらねばならぬ。

第三節 文化的環境

こゝにいふ文化的環境とは、日本人の生活圏(Life-cycle)のことである。生活圏とは生活様式が共同である一地域であつて、精しく觀察すればそれに二つの働きがある。即ち一つは生活圏内に於けるそれ自身の作用、他は生活圏外に於ける他の生活圏の作用である。或民族の生活様式は、常に自分の生活圏に規定せられ、また他の生活圏に影響せられて、絶えず、それ自身を變化せしめてゆく。かうした二つの作用が民族文化の進化を作る動因であつて、それを知るには、

一、文化地帯(Cultural Zone)

文化地帯

二、文化質 (Cultural Character)

三、文化圏 (Cultural Cycle)

四、文化移動 (Cultural Migration)

などの諸條件について豫じめ知つて置く必要がある。私は今、日本文化の有つこれらの特性について簡単に説明する。

(一) 文化地帯

文化地帯とは、地球上に一種の地帯が存在して、そこにそれ／＼特性ある文化が存在するといふ假定である。キツスラア教授は實際的事實に準據して世界を三文化地帯に分け、中央地帯、ツンドラ地帯、叢林地帯とした(巻頭圖版)。

(イ) 中央地帯 (Mesa Zone) は兩半球の中央に連亘して、東西に隆起した横の高地帯であつて、常に乾燥して居り、南ヨーロッパ、北アフリカ、エジプト、メソポタミア、支那、チベット、北アメリカ高原、ユカタン、アンデス山地、ペルウなどを之に屬せしめる。

(ロ) ツンドラ地帯 (Tundra Zone) は中央地帯の北部に横に連亘する地帯であ

つて、ツンドラから草原、平地、森林に達する間の土地を指す。北ヨーロッパ、ロシア、シベリヤ、モンゴリヤ、カナダ、北米合衆國東部、アルヘンチナ、バタゴニヤなどは之に屬せしめられる。

(ハ) 叢林地帯 (Jungle Zone) とは、中央地帯の南に横に連亘して東西線をなす低濕の地帯であつて、氣温は酷熱である。熱帯アフリカ、南アジア、熱帯諸島地、カリブ地方、アマゾン地方などは之に屬せしめられる。^(三四)

以上の三地帯を歴史的に考察すると、中央地帯はそこに古代文明が建設せられて、人類の繁榮幸福が見られた場所が多い。一々例證するまでもないことだが、ハム人の文明を創造したエジプト、セム人の文明が發達したメソポタミア、漢人の文化が旺盛を極めた支那、アツテク族やインカ族の古代文明が獨立的と思はれるまでに懸け離れて造就せられたメキシコやペルウは、いづれも此中央地帯の上に位置してゐる。

かう觀て來ると、古代文明と中央地帯とは切つても切れぬ不可分離の關係を有つてゐることが想像せられる。また今日の世界の文明状態を觀ると、大

體に於いてツンドラ地帯が高級の文化人に生まれ、反對に藪林地帯が文化の低級な野蠻人に生まれ、中央地帯は舊文明が僅かに保存されてゐるか、或は全くそれを失つてしまつたといふ有様である。かるが故に過去に於ける人類の歴史文明は、初め中央地帯に發生してツンドラ地帯に波及し、そこに成長を遂げた後更に藪林地帯に移動しようとしてゐると結論することが出来る。これらは地的環境の結果であるとするれば、結局文化は地と人との有機的關係を象徴する物質精神的現象であるといはれ得る。

さてかうした文化地帯から日本を見ると、いふまでもなく我邦は藪林地帯に屬してゐるが、其一部がツンドラ地帯に屬し、また中央地帯に近接してゐた爲め、早くから古代文化がこゝに輸入せられた爲めに、其文化史が比較的に夙くからページを展開したのである。

(二) 文化質

文化質の問題は最も複雑であつて、これを解決するのは困難であるが、大體に於いて文化は地理的環境の所産であるとするれば、其屬する地帯によつて一

種の特性を帯んでゐることはいふまでもない。たとへば藪林地帯の文化は簡單、輕快であり、ツンドラ地帯の文化は複雑、重厚であるといふ風の異ひがある。また一般に史學者が氣づいてゐる通り、東洋文明と西洋文明との間には自らなる差異があつて、前者は觀念的であるのに、後者は現實的である。音樂に例を取つていへば、西洋音樂は古代北歐の民謠の上に基礎を据ゑたもので、これを狩獵者の創作になつたものが次第に發達したと見ることが出来る。従つてそれをツンドラ地帯の所産であるといふことが出来る。これに反して東洋音樂は中央地帯の所産であつて、古代の農耕民衆がそれを製作したといふことが出来る。更に顔面表情の例を挙げれば、マンテガツアも指摘した如く、西洋のそれは表情的 (Sentimental) であり、東洋のそれは没情的 (Apathetic) であるといふと出来る。尙ほ繪畫を例に取つていへば、東洋のそれは舊套的表現で満足して、現實的であらしめようと努力しないのに、西洋のそれは表現を出来るだけ正確にしようとして、常に新しい努力を續ける。前者は主觀を主とするのに、後者は客觀を主とする。かうした風に東洋文化と西洋文化とは、

根本的に其質を異にしてゐる。簡単に兩者の差異を云ひあらはすことは困難であるが、若し強ひてそれを試みるならば、

	主觀的 (Subjective)		客觀的 (Objective)
東洋的 (Oriental)	觀念的 (Idealistic)	西洋的 (Occidental)	現實的 (Realistic)
	象徴的 (Symbolical)		模擬的 (Mimetical)

といふ風に區別することが出来よう。日本文化は勿論東洋文化に基調を有つものであるが、幾多の西洋的要素を包含してゐるので、其性質が甚だ複雑である。日本人が混血民衆であるやうに、日本文化もまた混淆文化であると見られる。

✓(三) 文化圏

次ぎは文化圏について窺はう。文化圏には大小がある。共同生活様式は大同小異の原理に従うて、幾通りにも區分せられる。日本文化は小にしては上方文化と關東文化とに分れるが、これを見れば日本文化であつて、朝鮮文化、支那文化など、對立するが、それらを見れば東洋文化となつて

西洋文化に對立する^(一五)。故に日本文化は東洋文化圏に屬するもので、最も多く東洋文化の影響を受けることはいふまでもない。私がこゝに文化圏といつたのは、詳しくいへば文化接觸圏 (Sphere of Culture-contact) であつて、生活圏とは多少意味を異にしてゐる。日本の地理的位置は、文化的にこれを觀ればアジヤの東端の中央に位して、北西はシベリヤに、西方は支那に、南西は印度に近接し、従つてそれらの三地方から我邦に文化的感化を及ぼした。古代に於ける東アジヤの文化圏は、少くとも如上の三つであつて、そこにそれらの文化が發達した。即ち、

- 一、シベリヤ文化 (Sibiric Culture)
- 二、支那文化 (Sinic Culture)
- 三、印度文化 (Indic Culture)

の三つは古代に於けるアジヤの中心文化であつて、そこから常に強力な文化移動の波がそれらを周匝するところの文化末梢地に向つて流れ出したのである。

(イ) シベリヤ文化は古代エジプトに起つた古代文化が東向してトルキスタンに至り、そこから二つに分れて、一つは北東向してシベリヤの小麥地帯に至り、南シベリヤを東向したもので、其文化中心はエニセイあたりであつたと思はれる。^(一七) 此文化は遠くはアメリカ大陸に移動し、近くは日本群島にも其波及を與へた。日本人の固有文化はシベリヤ文化であつて、印度の文化や支那の文化が日本に入る前に、原日本人の有つてゐたものである。シベリヤ文化は、かるが故に、日本文化の根本をなす基礎文化であつて、其後外國文化が來た時、それらを容易に受容し、消化し、攝取することの出來たのは、全くさうした固有文化があつた爲めである。具體的にシベリヤ文化を説明することは煩はしいから、二三の例を引けば、日本人の古代生活様式を特質づけたところの弓箭文化(Bow and Arrow Culture)ともいふべきものは、シベリヤ文化から受けたものである。弓箭文化は漠北に發達して、いはゆる『鳴鏑』の如き世界に類のないものを出現せしめた。突厥蒙古式の所謂『三翼鏑』(Three-winged arrow head)の如きも、トルコ、蒙古、ツングースら諸種族間に分布してゐた古代文化の一特

性であつて、全くシベリヤ民衆の發明したものである。鑑鏡の如きも中央に紐孔を有する圓形のもの、西方文化から刺戟せられてシベリヤで發達した一新形式と見ることが出来る。又思想上でいへば、シャマニスチックな宗教——アニミズムとアニマチズムとの中間にあり、また多少多靈教的要素を混へてゐるシャーマニズム(Shamanism)の如きは、明らかにシベリヤ民衆の所産である。これらのシベリヤ文化が原日本人に携へられて我邦に入つたのであるから、古代日本文化は殆ど全くシベリヤ文化であつたと見てよい。否、觀方によつては、現代の日本文化さへもこれをシベリヤ文化の一つであるといふことが出來ないこともないのである。

(ロ) 支那文化は、西方文化を携行して、西アジアからタクラマカン沙漠盆地に出で、そこから黄河溪谷に進み、更に東進、北進、南進したところの漢族即ち原支那人の固有文化であつて、其文化中心は陝西省^(一七)であつた。それ故に、此文化の系統は、トルキスタンまで溯れば、シベリヤ文化と同源であることを發見するであらう。此文化の特質は、實際的、現實的であつたものが化石化して、觀念

的、舊套的となつた點にあり、其最も偉大なものを擧げると、漢字、儒教、政治形態などを指摘することが出来る。此文化の日本への影響は比較的、新らしいが新しいだけにそれだけ進歩的、強化的であつて、久しい間日本文化を支配する指導的位置を占めてゐた。

(ハ) 印度文化は、エジプトに發生した文化が南東向して、ペルシャ、アフガニスタン、ベルチスタンを経て印度に入つて完成したもので、そこから一は南東向して海洋中に入つたものが太平洋諸島の文化となり、他は北東向して支那沿岸及び日本群島に入つたのである。此文化に改善、進歩、造就を與へたものは、ツンドラ文化を大成したところのアーリヤ族(Aryans)の一支族であつて、或學者たとへばダウントの如きはそれをフェニキヤ人(Phoenicians)に擬し、他の學者たとへばワツデルの如きはそれをスメル人(Sumerians)に擬してゐる。印度文化の大成せられた後、印度アーリヤ族の一支族はガンガ河口から海洋に浮んで東印度諸島に入り、ジャバに於いては有名なポロプーゾールの如き大藝術を遺した。今日人種學者の間にインドネジャ族と呼ばれてゐるものは

此支族であつて、其固有文化は印度文化であるが、それを人種と共に日本に輸入したのは古いことである。インドネジャ族と同時、或はそれより以前に印度文化及び支那文化の影響を受けた印度支那族が、二つの文化的影響を我邦に與へたから、印度文化は日本に二重の作用をはたらきかけてゐるといふことが出来る。佛教の如き思想方面は勿論、米作の如き經濟方面に重要な生活革命を起したのも、實は印度文化の片割であつた。

かう觀て來ると、日本の文化接觸圏は甚だ廣く、シベリヤ文化、支那文化、印度文化を吸収するのに都合のよい場所に位置してゐたといふことが出来る。日本文化が複合的であるのはこれが爲めである。

(四) 文化移動

最後に文化移動について略述する。文化の發生、成長について大體そこ四通りの説がある。第一はシニミットなどのやうに、各々圏をなしてゐるところの文化、即ち共同生活様式は、それ／＼獨立的に起つたものであると説く獨立發明説(Theory of Independent Invention)である。第二は第一の範疇内に入

れてもよいものであるが、各文化には類同點があつて、それらを各々獨立的に發生したものと見かねると主張する者があるけれど、人心作用は同似してゐるから同似文化を造るのであると説く、人心作用同似説 (Theory of the Similarity of the Working of the Human Mind)⁽ⁱⁱⁱ⁾である。第三も矢張り第一の範疇内にあるものであるが、リヴァーズなどの如く、異處に於ける文化の同似は、同似せる外界の影響を受けた爲めに不同似のものが同似するに至つたと説く文化近似説 (Theory of Cultural Convergence)⁽ⁱⁱⁱⁱ⁾である。第四はペアリイなどの如く、文化は素と一つで、一度しか起らぬものであつて、それが各地に移動したのであるから、甲と乙と相隔つた地點に同似或は同一の文化があつても、それらは近似説や人心作用同似説で説明してはならない。さうした説明では解決のつかぬ同似及び同一が異地の文化に發見されるから、それらは徹頭徹尾傳播したものと見なければならぬと説く文化移動説 (Theory of Culture-Migration)^(v)である。私は以上四つの中、どれが一番妥當性に富んでゐるかと尋ねられたら、第四説、即ち文化移動説を以てそれに擬したいと思ふのである。既に文化が移動

するものであるとすれば、當然そこには文化の移動線 (Migratory Routes) とするものがなければならぬ。私は

一、北方移動線 (Northern Migratory Route)

二、中央移動線 (Middle Migratory Route)

三、南方移動線 (Southern Migratory Route)

の存在を主張し、それらの證據を容易に擧げることが出来る(卷頭圖版)。日本には此北方線を通してシベリヤ文化が入り、南方線を通して印度文化が入り、中央線を通して支那文化が入つて來たのである。遠古にアメリカ大陸へ黄色人種がアジアから移動していつた際、シベリヤ文化を携へて行つた路線は此北方移動線であつた。名も知られぬ幾多の英雄旅行家が、メソポタミヤの文化を支那に輸入したのも、張騫の如き探検家が支那から西方アジアに出て、其新文化を支那に導入したのも、皆此中央文化移動線であつた。エジプトの文化が印度に移り、印度の文化が南洋に入り、支那沿岸に入り、日本群島に入つたのは、此南方移動線であつた。文化移動と同時に、これらの三線を通して人

種移動の行はれたことも注意せられねばならぬ。^(三五)

次に、若しもそこに文化移動がありとすれば、文化には中心 (Centre) と末梢 (Margins) とがあつて、常に中心から末梢に向つて移動し、末梢はそれらを受けて發達進歩せしめ、第二次中心となつて改造文化を他の末梢に輸出する作用をなすとを私達はデキソンなどと共に認めない譯にはいかぬ。^(三六) 我日本の如きは古代に於いて東端の文化末梢であり、中世に於いても依然末梢の位置を脱する事が出来なかつたが、近世に於いて次第に第二次中心の位置を占め、今日に於いては或意味に於いて東洋の文化中心であり、日本を中心として他の東洋諸國に輻射線を引くところの日本の東洋文化圏を有つに至つた。かうして更に歐米文化に對してすら、文化的影響を道德、藝術などの點に於いて與へる力量を養成し得たとは誰れしも氣づくところであらう。日本現代の文化の世界的位地は、ヴァレンチン・チロルの所謂『東洋の反逆』^(三七)によつて急激に昂揚し、そこに一種の東洋的、西洋的文化 (Oriental-occidental Culture) といふものが出来上らうとしてゐる。現代に於ける日本文化は、實に東西文明の調和に

基づいたところの全幅的文明、總計的文明の將に生れんとする産褥的現象を呈してゐると見ることが出来るもので、過去に於ける文明輸入國は、これから先き一轉して文明輸出國になるかも知れないといふ大切の場合である。

故大隈重信侯もいはれた通り、今後の日本の地理的位置は、東西兩洋の文化が融和、混淆、複合すべき重要地點である。日本は東半球と西半球との中間に位して、東洋文化の粹と西洋文化の粹とを集成し、湊合し、新文明をこゝに建設し得べき日を迎へたのである。^(三八) 文明史上に於ける現在の日本の地位は、古代に於いて世界文明を凝集せしめたローマのそれに似てゐる。日本文化はもはや東洋の一端といふ地位を變へて、東西兩半球の東方中心といふ地位を占めようとしてゐる。日本の文化的環境は、其地理的環境と共に、古代とは正反對の状況を出現せしめた。これは勿論、『時』の力でもあるけれど、また『人』の力にも依ると見なければならぬ。其『人』の力を研究し、その將來に於ける活躍を豫察しようとするのが文化史の任務である。現代はたしかに日本民族の試鍊の時代で、日本民族が過去の所動的地位を將來に於いて能動的地位に

置き換へ得るか否かの分れ目である。此分れ目に立つて過去を回顧して、民族が數千年來經歷したところの過程を知らしめ、それを参考に資せしめようとするのが文化史本來の目的である。

第四節 摘要

以上、私は地理的、並びに文化的環境について、項を分けて論述し來つたが、今、それを便宜の爲めに收拾して、次ぎの結論に導かうと思ふ。

(1) 日本はアジアの東端に位して、大陸から遠く隔つてゐる爲めに、久しい間、人種的並びに文化的に、世界から孤立するやうな傾向を有つてゐたが、今日に於いては文明進歩の結果、さうした特性が失はれてしまつた。

(2) 日本の地勢は山岳的、島地的、海洋的であつて、さうした影響を日本人の體質及び文化に與ふべき性質を有つてゐる。其島國性は過去に於いて日本の民衆と文化とを扞護したが、將來に於いては世界の人種的、文化的要素を全幅的に凝集、同化せしめる可能性を有つてゐる。

(3) 日本の地域は狭小だけれども、氣候が變化に富み、豊富なる降水量と天産物とを以て、其民衆生活に惠福と安定とを與へて、人口の増加を來し、従つて植民其他の手段を採つて海外に發展する機會を見出さしめるであらう。

(4) 日本文化は本來叢林地帯に屬するけれども、中央地帯とツンドラ地帯とに近接してゐる爲め、それら二つの文化を攝取して比較的複雑な性質を有つてゐる。

(5) 古代日本は文化移動線の終點で、シベリヤ、支那、印度、三様の文化がそれぞれ、の路線を通つて日本に落ち合ひ、そこに一種の文化混淆を見たが、近代に至つて其位地を轉換し、歐米文化と東洋文化とがそこに握手して、當來世界の支配的新文明を作り出すべき運命を迎へようとしてゐる。

(6) 文化史上、現代の日本は極めて重要な運命の回轉點に立つてゐる。其將來に繁榮と幸福とを齎して、社會人類の爲めに貢獻するところがあるか否かは、一に日本民族が民族史のインデックスによつて、過去に有つた經驗を顧みて、將來の眞正の針路を見出し得るか否かに係つてゐる。

この説によれば、地
球の地理的、文化的
環境に、さうした注
意をすべきである。
見らるべき。

引用參考書

- (一) P. Topinard. *Anthropology*, p. 402 #.
- (二) F. H. Giddings. *The Principles of Sociology: An Analysis of the Phenomena of Association and of Social Organization*, p. 82 #.
- (三) cf. J. H. Breasted. *A History of Egypt*, p. 1.
- (四) 山崎直方, 中等日本地理教科書。
- (五) 陳壽, 三國志(魏志倭傳)
- (六) W. E. Griffis. *Japan in History, Folk-lore and Art*, p. 1.
- (七) 第四十六回統計年鑑。かうした數字は殆どすべて統計を見れば得られる。最も便宜で安價なのは、各新聞社で年々出版せられる年鑑類である。
- (八) 西村眞次, 大和時代, 三七頁。
- (九) 渡瀬庄三郎, 巨獸の遺物と動物地理。
- (一〇) A. C. Haddon. *The Wanderings of Peoples*, p. 1 #.
- (一一) A. R. Wallace. *Island Life*, 1892.
- (一二) Lucien Febvre. *A Geographical Introduction to History*, p. 206.
- (一三) J. C. Willis. *Age and Area*, pp. 228, 229.

- (一四) C. Wissler. *Man and Culture*, p. 228 #.
- (一五) 西村眞次, 日本古代社會, 一一頁。
- (一六) cf. G. Elliot Smith. *The Ancient Egyptians and the Origin of Civilization*, p. 191.
- (一七) *Ibid.* p. 198.
- (一八) G. E. Smith. *The Migrations of Early Culture*, p. 14.
- (一九) H. D. Daunt. *The Centre of Ancient Civilization*, p. 15 #.
- (二〇) L. A. Waddell. *The Indo-Sumerian Seeds Deciphered*, p. 27 #.
- (二一) P. W. Schmidt. *Panbabilonismus und ethnologischer Elementargedanke*, 1908.
- (二二) cf. R. B. Dixon. *The Building of Cultures*, p. 33.
- (二三) W. H. R. Rivers. *Psychology and Ethnology*, p. 144.
- (二四) W. J. Perry. *The Growth of Civilization*, p. 1 #.
- (二五) 西村眞次, 文化移動論, 參照。
- (二六) R. B. Dixon. *op. cit.* p. 106 #.
- (二七) Valentine Chirol. *The Occident and the Orient* (Foreword, viii).
- (二八) 大隈重信, 東西文明之調和, 參照。

第三章 人種論

第一節 天降説話

人間は忘却の動物である。日本人も過去を忘却して、其祖先がどこから来り、いつ此群島に棲息したかを忘れ終せた時に、原始人が採る手段を取つて、彼等の間にこゝだくの文化神話(Culture-myth)が出現した。文化神話とは原始的文化史である。知識、感情、意志のまだ十分發達しなかつた時代に、其乏しい知識によつて推想した不合理的な、しかしながら彼等自身に取つては十分合理的であつた民族歴史が即ち文化神話である。文化神話は、かるが故に、歴史的事實其物ではないが、歴史的事實を反映したところの類歴史的事實であると見ることが出来る。

私達日本人の祖先の有つてゐた神話は、多く『古事記』や『日本書紀』に記載

せられ、また『風土記』や『古語拾遺』にも若干は現はれて居り、記載せられずに民間に傳はつてゐる傳説や墮落して變形した童話、童謡の類もある。しかし、それらの中、基本的であり、證典的であるものは、前記の記紀二書であらねばならぬ。

記紀の記載に従へば、私達日本人の祖先は高天原から天降つたことになつてゐる。高天原とは古代人の信仰では、天上に於ける神々の所在である。天上から人間が降つて来たといふことは、知識の進歩した者には信ぜられぬことなので、此神話に合理的解釋を與へて、高天原とは日本人の故郷のことであるといふ風に説くものが現はれた。と、故郷とは何處だといふ問題が起つて、江戸時代以來、色々の憶測が行はれ、常陸説、伊勢説、大和説、朝鮮説、支那説などが主唱せられ、また明治以後は學者の視野が廣がるにつれて、バビロン説、マライ諸島説、中央アジア説、ギリシヤ説などが行はれた。これらの諸説はいづれも神話を史實と見たところのオイエメロス主義(Euhemerism)、或は史實の反映と見たところの反映主義(Reflection Principle)であつて、共に歴史的事實の叙述

ではない。合理的解釋の發達の途上に於いては、昔は天が今よりも近く、長い梯子をかけて昇降することが出来た、天の橋立は神々の梯子で、神々が寝てゐられる間は地に横はつて居り、起さられると立つて天地の間を綴るといふ風に解釋した時代があつた。『釋日本紀』の如きは即ち其一例である。

人祖天降説話は往々保守的な日本人の一部によつて、獨り我邦にのみ存在する神話であり、従つて日本人は本當に神裔であり、日本帝國は本當に神國であると思つてゐるものもあるやうであるが、天降説話はどこの民衆も殆んどすべてこれを有つて居る。一例すればインドネジャ人の如きは、自分達を天人 (Sky-people) の末孫であると信じてゐる。さうした風に天降説話が廣い範圍に亘つて有つてゐることは、此説話が遠い昔に或一地點で作られ、それが段々に民衆の移動及び觸接によつて擴布したと見なければならぬものである。かう観るのが神話傳播説 (Theory of Mythical Diffusion) である。然るにさうではなくて、日本でも起り、インドネジャでも起つたと見るのが神話獨立起源説 (Theory of Independent Origin of Myth) である。勿論、今日では獨立起源説より

神話起源
二説

も傳播説の方に勝味が多いが、いづれにしても、さうした類似の説話が方々にあるといふことは事實で、古代民衆が忘られた長い間に、高地から平地へ下つて來た歴史の口頭的傳承であるといふ風に、人祖天降説話のモチイフを解するものがある。人類は曾て樹上生活を送つたともあり、従つて山岳地帯から平原地帯に降つて來たのであるから、それがモチイフであると説くことは必ずしも不當ではない。しかし、それは人類總體の生活様式の進化について考へる時には役立つが、日本人のそれについて考へる時には大して重要でない。

私達の祖先を考へる場合には、人種學的方法 (Ethnological Method) を採るのが一番早道である。人種學的方法といふのは、體質的に日本人を考察することである。人種の起原については兩様の説があり、初めから人種といふものがあつたと観るのが複原説 (Polygenism) であり、いや初めは一色であつたものが、地理的環境で今日のやうに分岐したのである、白人種も黄人種も黒人種も祖先は一つであると観るのが單原説 (Monogenism) である。^(三) クライツ^(四)、ハウゼル^(五)

人種起源
一説

などは前者であり、キーン(六)などは後者であるが、進化論を信ずる以上は單原説の方が勝味が多いと思はれる。いづれにしても、人種の分れたのは餘程古い時代のことで、キースに従へば四十萬年以前である(七)。さうした遠古のことは、日本人と直接の關係がない。

第二節 日本人の體質的特徴

日本人の人種的地位を知らうとするには、日本人の有つてゐる體質的特徴を求めて、それが如何なる人種に相當するかといふことを研究するより外に道がない。人種を規定する標準は、これを人種的規準(Racial Criteria)とす。人種規準には文化的規準と體質的規準と二色あるが、重要なのは體質的規準で、文化的規準は参考にしかならぬといふのが一部の人類學者たとへばデキソン(八)などの考へである。普通に體質的規準といはれてゐるものは、

- 一、頭形示數(Cephalic Index)
- 二、鼻示數(Nasal Index)

三、身長(Stature)

四、毛髮(Hair)

五、眼形(Eye-Form)

六、膚色(Skin-Colour)

などである(九)。デキソン教授の如きは、頭幅示數、頭高示數、鼻骨示數の三つだけで澤山で、他は贅疣であるといつてゐるが、それら以外のものも人種を規定する標準にならぬことはない。(一)頭形示數とは、頭長を一〇〇と見做して、それに對する頭幅がいくらあるかと觀るものである。(二)鼻示數(註)は鼻の高さに對する廣さの比率である。(三)身長とは頭頂から足跡に至る全長である。(四)毛髮は其形をいひ、(五)眼形は蒙古型であるか、歐羅巴型であるかを見ることであり、(六)膚色はその色差を觀ることである。

今、日本人の體質的規準を見ると、次ぎのやうな數字を示して來る。此數字をどう解釋するかといふことは、それらを取扱ふ人々の考へ方によつて、色々の答へが得られるだらうが、大體に於いては日本人が單式人種、即ち純粹型で

なくて、複式人種、即ち混血型であることを示すといふとがいられるだらう。

(一) 日本人の頭形示数

日本人の頭形示数は、學者によつて其數字が異り、京都帝國大學は合七九二一、早八一・二七を示し、中野博士は合八一・二七、早七八・七七、足立博士は合七八・三〇、早七九・七〇を示し、ベルツ博士は八〇・三〇を計へてゐる。然るに日本人中には往々にして九〇・〇〇以上の示数を有つたものがある。必ずしも例外でなく、可也多數にそれが發見せられる以上は、廣頭的動因を認めないわけにはいかぬ。しかし、最近に男子六千人について頭形を測定した松村瞭博士の數字は、

頭形示数	頻数	百分率	順位	型式
78.00—79.00	619	10.32	3	中頭
79.00—80.00	618	10.30	4	
80.00—81.00	709	11.82	1	短頭
81.00—82.00	657	10.95	2	

の如くで、日本人男子の頭形示数は六千人中の七百〇九人、即ち百分中の一一・八二パーセントは八〇・〇〇乃至八一・〇〇であるといふことが明らかになつた。そこで、これを近周諸民族に比較して見る必要があるが、それらの中、八〇・〇〇乃至八一・〇〇の示数を有つたものを舉げて見ると、

- コリヤーク族 (Koriaks) 八〇・三
- ユイカギル族 (Yukaghirs) 八〇・四
- オスチャク族 (Ostiaks) 八〇・七 北群
- ツングース族 (Tunguses) 八〇・八
- アジアのエスキモー族 (Asiatic Eskimo) 八〇・八
- ロロ族 (Lo-lo) 八〇・二
- 苗子族 (Miao-tse) 八〇・二
- 北支那人 (North Chinese) 八〇・二
- 同 八〇・四
- アオ族 (Ao) 八〇・四

チブラ族 (Tipra)	八〇・五
シャン族 (Shans)	八〇・五
バラウング族 (Palauung)	八〇・五
下緬甸人 (Lower Burman)	八〇・五
レプチャ族 (Lepcha)	八〇・五
儂族 (Nong)	八〇・五
客家族 (Hak-ka)	八〇・五
上緬甸族 (Upper Burman)	八〇・五
ミリ族 (Miri)	八〇・五
クハムブ族 (Khambu)	八〇・五
東西藏族 (East Tibetans)	八〇・五
メナングカバウ族 (Menangkabau)	八〇・五
カヤン族 (Kayan)	八〇・五
バッタ族 (Battas)	八〇・五

南群

ビラ・アン族 (Bila-an)	八〇・四
プユマ族 (Puyuma)	八〇・七
ニヤ島土人 (Nias Islanders)	八〇・七
バイワン族 (Paiwan)	八〇・九

嶋群

の如き数字を見る。そこで松村博士は、日本人は頭長、頭幅、頭形示数に於いてアイヌ及び朝鮮人と異つてゐる、統計の點から云へば甚だしき差異を示してゐる。これら諸特質の中敷を直接比較した上では、日本人は東シベリヤ及び南支那の諸民衆に酷似してゐるといふ結論に到達した。

(二) 日本人の鼻示数

日本人の鼻骨示数は、最大高徑五〇・一であり、最大幅徑二五・〇であるとせられてゐるから、其示数は次ぎの運算を経て四九・九といふ答へが得られる。

$$\frac{25.0 \times 100}{50.1} = 49.9$$

鼻示数の分類は、最近のハッドン教授のそれに従へば、

型	式	鼻	骨	鼻	形
狭鼻 (Leptorrhine)			四七以下		五五以下乃至七〇
中鼻 (Mesorrhine)			四七乃至五一		七〇乃至八五
扁鼻 (Chamaerhine)			五一乃至五八		八五乃至一〇〇以上

であるから、日本人の鼻骨示数の示す限りでは、日本人の鼻は高くもなく、低くもない中鼻である。中鼻は生態の鼻形示数に於いては、七〇乃至八五であるが、今、世界諸種族の鼻形示数中、中鼻に属するものを列挙して見ると、

- エスキモー族 (Eskimos) 七〇・三〇
- 北米インド人 (N. American Indians) 七〇・六〇
- カルマック族 (Kalmuks) 七四・八二
- カラキルギス族 (Kara-Kirghiz) 七四・九〇
- シンハリース族 (Sinhalese) 七五・七〇
- 安南族 (Annamese) 七六・八〇
- 支那人 (Chinese) 七七・〇〇

- 北蒙古族 (N. Mongols) 八一・二〇
- 南米インド人 (S. American Indians) 八一・四〇

の如くで、日本人の鼻はこれらの諸種族に類似を有つてゐるわけである。但し注意すべきことは、日本人の鼻の中に、尖つて鼻底が下向きになつてゐるユダヤ鼻や梁が高く節のあるローマ鼻のあることである。これらはどう解釋すべきであらうか。

(三) 日本人の身長

日本人の身長は、松村博士の^(一四)測定に従へば、男子五千九百七十人の中、最も多く見出されるのは、

身長	頻数	百分率	型	式
163.0—164.0	517	8.66	稍	低身
160.0—161.0	518	8.51	"	"
162.0—163.0	468	7.84	"	"
159.0—160.0	416	6.97	低	低身
161.0—162.0	396	6.63	低	低身

で、大體に於いて日本人男子は一六〇糎乃至一六四糎であり、其中頻數の多いのは一六三乃至一六四糎で、百分の八・六六を示してゐるから、中身よりは稍々低く、低身よりは稍々高いといふことが出来る。其平均身長は一六一・九八糎である。また婦人の身長は近年累進の状態を呈してゐるが、松村博士に従へば、其平均身長は一四九・九二糎を示してゐる。そこで先づ男子を標準とし(女子を参考として)、日本人に一番多く見出される稍低身及び低身の一部に屬する一五九・〇乃至一六四・〇の身長を有する近周民族を次ぎに列擧して比較を試みよう。

種族名	男子	女子
アイヌ族 (Ainu)	一五九・五	一四七・一
コリヤーク族 (Koriaks)	一五九・六	一四九・一
ソヨン族 (Soyons)	一五九・七	一五一・二
カンチャダル族 (Kamchadals)	一六〇・一	一四九・六
朝鮮族 (Koreans)	一六一・三七	一四九・四

チュクチ族 (Chukchis)	一六二・二	一五二・二	北群
ギリヤーク族 (Giliaks)	一六二・二		
アジアのエスキモー族 (Asiatic Eskimos)	一六二・三		
ヤクート族 (Yakuts)	一六二・四	一五一・二	
滿洲人 (Manchu)	一六三・〇		
ブリヤート人 (Buriats)	一六三・一	一五一・八	
タルグート族 (Targuts)	一六三・三		
貉族 (Yao)	一五九・三		
潞子 (Lu-tze)	一五九・四		
シャン族 (Shans)	一五九・四		
安南族 (Annamese)	一五九・四	一五二・七六	
儂族 (Nong)	一五九・五		
チャクマ族 (Chakma)	一五九・五		
スガウ・カレン族 (Sgaw Karen)	一五九・八		

Handwritten notes and calculations at the bottom left of the page, including numbers like 160, 33, 200, and 100, and a small table with a vertical line.

マン・タ・パン族 (Man Ta Pan)	一五九八四	
暹羅族 (Siamese)	一五九九	
マギー族 (Magh)	一五九九	
リムブ族 (Limbu)	一六〇三	
モイ族 (Moi)	一六〇三	
ラブハ族 (Robha)	一六〇五	
チングバウ族 (Chingpaw)	一六〇五	
カチャリ族 (Kachari)	一六〇八	
プオ・カレン族 (Pwo Karen)	一六〇九	
支那人 (Chinese)	一六一〇七	
チブラ族 (Tibra)	一六一二	
タウンツス族 (Taungthusa)	一六一二	
シンテング族 (Sinteng)	一六一二	
ネワル族 (Newar)	一六一四	

南群

緬甸人 (Burman)	一六一九	
客家族 (Hak-ka)	一六二二	
トンキン人 (Tonkinese)	一六二二八	
東埔寨人 (Cambodians)	一六二三	
タライング族 (Talaing)	一六二五	
クイ族 (Kuy)	一六二七	
ホクロ族 (Hok-lo)	一六二七	
本地族 (Pun-ti)	一六二九	
西藏人 (Tibetans)	一六三三	
アルレング族 (Arleng)	一六三三	
アングミ族 (Angami)	一六三九	
マヅリース (Madurese)	一五九一	
スンダ島土人 (Sundanese)	一五九一三	
タイタイ族 (Peoples of Taytay)	一五九四七	

チモル島土人 (Timor Islanders)	一五九・七	一四九・六
メナングカバウ族 (Menangkabaw)	一五九・九	
バッタ族 (Batas)	一五九・九六	
ボントク・イゴロ族 (Bontoc Igorots)	一六〇・二九	一四五・八
テングリス族 (Tengerese)	一六〇・四	一五一・三
ヤミ族 (Yami)	一六〇・五	
ロッチ島土人 (Rotti Islanders)	一六〇・五	一四八・三
プナン族 (Punan)	一六〇・六	
スバヌン族 (Subanuns)	一六〇・七	
マカッサル族 (Macassar)	一六一・五	
ジャバ島人 (Javanese)	一六一・七六	
デリ・マライ族 (Malays of Deli)	一六二・二一	

島群

これらの諸種族は、いづれも平均身長が一五九〇乃至一六四〇厘のもので、日本人に近い身長を有つたものである。そこで、日本人は身長の上からいへ

ば、北群に於いては朝鮮人、滿洲人、東シベリヤ住民に、南群に於いては南支那及び印度支那の民衆に、島群に於いてはフィリッピン、ジャバ、及び其近周、並びにスマトラの土人によく似てゐるといふ結論に松村博士は到達した。しかし、日本人の身長は逐年増加の傾向を有つて居り、また過去に於いては高かつた痕跡があるから、其本来身長は現在の示數以上ではないかと思はれる。

(四) 日本人の毛髪

毛髪の點から日本人を観ると、蒙古人種としての特質を現はしてゐる。蒙古人種の理想的型式からいへば、其毛髪は黒直毛であるが、日本人の毛髪は私の觀測に従ふと、

直毛 (Straight Hair)	九一パーセント
波状毛 (Wavy Hair)	六パーセント
鬘毛 (Frizzy Hair)	三パーセント
羊状毛 (Woolly Hair)	〇パーセント

といふ割合を示し、中に多少の波状毛らしい痕跡が六、鬘毛らしい傾向が二三、

羊状毛らしい痕跡が二を示してゐる。^(一六)これによつても日本人の混血民衆であることは疑ひの餘地がない。

(五) 日本人の眼形

次ぎに眼形の上から日本人を観ると、これまた純粹型であるといふことを示す證據にはならない。私の觀測に依ると、

歐羅巴眼 (European Eye)

三〇パーセント

類蒙古眼 (Mongoloid Eye)

四三パーセント

蒙古歐羅巴眼 (Mongolo-European Eye)

二七パーセント

といふ數字を示す。^(一七)類蒙古眼が一番多く、次ぎが歐羅巴眼で、中間型たる蒙古歐羅巴眼が其次に位してゐるが、約半數は類蒙古眼であるから、日本人は主として黄色種であるといふことが出来る。のみならず、眼の色——虹彩から見ると、日本人のそれは大方茶褐色をしてゐるが、中には若干の碧色を呈してゐるものもあつて、コーカシヤの特徴が隔世遺傳的に現はれたのだと觀なければならぬ場合がある。

(六) 日本人の膚色

最後に膚色から日本人を観ると、色の白いものもあり、また黒いものもあるが、大體に於いては黄色を呈してゐる。また白いものでも、皮膚の表面に黄色い影がさしてゐて、白人種の白さとは趣きを異にして、主體は黄色であり、それに若干の白種と黒種とが混つてゐるのだといふ指示が得られる。

以上の外、尚ほ耳形とか、唇形とか、顔面角度とか、色々の條件を擧げることが出来るが、普通には前述の六項を以て人種を規定することが出来るといはれてゐる。ともかくも、今まで述べたところに依つて、全日本人は高天原から天降つた純粹型の神奇的人種でなく、諸方から日本群島に移住した諸種族の混血型であるといふことが明らかになつた。然らば何種族の混血民衆であるか、それは體質的特徴ばかりでは容易に決することが出来ないが、大體に於いて黄色人種の血液が濃厚であり、多毛、碧眼のものなどから白人種の若干の痕跡を認め、また鬘毛、反唇のものなどから黒人種の混淆をも否定することが出来ない。黄色種としては支那人よりも、シベリヤの民衆や南支那、印度支那の

民衆に類縁を有つてゐるといふことだけは證明せられる。

第三節 日本人の文化的特徴

前述の體質以外のことは、文化的規準の力を借りてこれを歴史的に證據立て、來なければならぬ。最近にはル^(一)ッ^(二)シャンなどの如く、人種とは文化の差異に過ぎないと力説するものすらもあり、文化的規準は一層重要な地位を占めて來た。文化的規準はいくつもあらうけれど、第一に役立つものは言語である。言語以外にも生活の種々相、たとへば食住衣などの物質的特徴を初め、社會組織、工藝技術、宗教思想などが、人種を鑑別、規定するところの標準となる。今それらを次ぎに列擧する。

- 一、言語 (Language)
- 二、物質的特徴 (Material Traits)
- 三、社會組織 (Social Organization)
- 四、技術 (Arts)

五、宗教 (Religion)

六、神話 (Myth)

などは主要的なもので、此外に尙ほ補助的なものをいくつか擧げることが出来る。しかしながら細目は却つて煩雜を來して理解を妨げるから、以上の主要項目のみについて述べることにする。

(一) 日本人の言語

言語の點から觀ると、日本語は漆着語 (Agglutinative) であつて、漢字を使用しつゝあるにも拘はらず、孤立語 (Isolating) である支那語とは全く構造形態を異にしてゐる。日本の古代語を沖繩の方言や支那語の影響を受けなかつた前の朝鮮語に比較して見ると、そこに三者の間に類縁が見出され、これらの三つは遠古に於いて、共同の祖語から分岐したものであることを私達に推想せしめる。朝鮮語は單に語彙のみならず、語法に於いても日本語に酷似してゐて、最も近い關係にあることは疑ひの餘地がない。白鳥博士は母音調諧が日本語に缺けてゐる故を以て、日鮮語の類縁を斷ずるには基本的の缺陷があると

主張してゐるが、それは或は過去に於いて存在してゐたかも知れない。數詞の不一致もまた屢々日鮮語を分離した關係に置くことの理由となつてゐるが、新村博士の努力によつて若干の數詞が古代に於いて一致してゐたことが發見せられた。完全な證據が得られるまで、或證據と他の證據との間を假りに連結することは、所謂「missing link」を假定する方法であつて、さうすることによつて私達は日本語が朝鮮語、沖繩語、滿洲語、ツングース語と近い類縁を有つて居り、従つて遠い昔に共同の一祖語から分枝したといふことを推想し得るのである。日本語の中には若干のアイヌ語も混つてゐるが、語法は兩者の間に一致を見ないから、私達は日本語とアイヌ語とを近縁の關係にあると見ることは出来ない。勿論、日本語の過半は漢語の日本化されたものであるが、それは單語だけであつて、語の構成は支那語とは全く異つてゐるから、日本語は支那語とは類縁を有つてゐないと見るが妥當である。インドネジャ語、安南語などにも類似を有つた語彙が發見せられるが、これも主として文化接觸（若干は體質的關係もある）によつて獲得した結果に過ぎない。かう觀て來る

と、日本語は朝鮮、滿洲、シベリヤに互つて住むところのツングース族に共通した言語であり、従つてこれをツングース系(Tungusic Stock)であるといつても差支へないであらう。日本語がツングース系であることは、頭形、示數、身長などの指示に一致してゐて、日本人を構成するところの重要々素がツングース族であることを私達に知らしめる。

(二) 日本人の物質的特徴

第二に物質的特徴から觀なければならぬが、其中重要なのは食料である。日本人の主食物は米であるが、米は餘程古い時代から食用に供せられてゐたと見えて、神話中にも高天原でアマテラス大御神が米を栽培せしめられた物語があるが、最近に中山博士によつて筑後八女郡長峰村岩崎の彌生式遺跡から黒焦げになつた粃米が發見せられ、また曾ては繩文式土器の底部に米の印刻の残つてゐるのも發見せられて、神話の通りに米が遠古から栽培、食用されたとは最早や問題ではない(第十圖版123)。米を意味するウルチは古代印度語の *Vrihi* から來たものであり、其原産地はデッカ半島南部であるといふ

ことが植物分布學上是認められてゐるからして、米は日本に南方から輸入されたものであるといふ結論に私達は導かれねばならない。米を日本に輸入したものは、現に印度支那地方に占據してゐる印度支那人、たとへばアンナム人、トンキン人、ビルマ人、苗族などの共同祖先であつたと思はれる。^(二〇)

次ぎに家屋の點から観ると、日本人の現在の家屋は多く構架式(Constructive)であるが、これは古代の夏家の進化したもので、別に冬家といふ一型式を古代日本人は有つてゐた。冬家は夏家の如く地上に構架せられるものでなく、地中に穴を掘り、其上に屋根を葺いたものであつた。それは今日も尙ほムロの型式となつて残存して居り、半穴居、半地上式の構造であつた。今日各地に發見せられる堅穴は、一つはアイヌの祖先、舊アイヌ(Palae-Ainu)のものであらうが、一つはツングース系のものである。『魏志』に馬韓の住居を叙して、『居處作草屋土室。形如冢。其戸在上。舉家共在中。』といひ、『魏略』に辰韓の家屋を叙して、『其國作屋。橫累木爲之。有似牢獄。』といつてゐるのは、冬家と夏家との二型式を現はしたもので、前者は堅穴であり、後者は地上住居であつたことを示すも

第一圖版 古代建築と古代衣服

(A)は古代建築の一様式、校倉式建築の寫眞である。(1)は唐招提寺に残存してゐる寶藏で、今日は特別保護建造物になつてゐる。之は正倉院の校倉など同一型式のもので、古代にはアサクラと呼び、朝鮮にも昔はあつたことが『魏略』の記載で知られる。此型式はシベリヤ系統のもので、(2)に示したゴルヂ族の倉と其構造が一致してゐる(七九頁参照)。

(B)は古代衣服の一様式を示し、且つそれが日鮮共通であつたことを證明しようとしたものである。(3)と(4)とは新羅の都慶州附近で發見せられた篋繪脚附で、共に人間の衣服を纏うた鳥が表はされてゐるが、前者は女性、後者は男性である。女性は筒袖にスカートを、男性は筒袖にズボンを穿いてゐる。(5)は河内國高井田の横穴古墳の側壁にある陰刻の拓影で、古代の生活を還元するのに重要な構圖であるが、其服裝を前述の新羅のものや、古墳から發見せられた埴輪土偶などに比べると全然一致してゐるのを見出す(八〇頁参照)。

のである。地上住居はツングースのツム、キルギスのユルタなどに共通する天幕形式で、初め圓形のものが六角になり、四角になつたのである。今日葎板は縦にも張られるが、古代に於いては横に積み重ねて、シベリヤに多く見られる植民地型(Colonial Type)を現はしてゐた。古代日本語に於いてアサクラといひ、後に校倉といつた型式は即ちそれである(第一圖版A)。然るに日本家屋を南方型式のものと速断する學者がある。勿論、日本の木造家屋には若干の南方型式が入つてゐるかも知れないが、千木、鯉木、高床などは、獨り太平洋諸島に見られるばかりではなく、シベリヤに於いても見られる型式である。ロバーチンのゴルヂ族の建築についての記述を見れば、建築學者が日本建築の最古の型式と見做してゐる天地根元造り、出雲大社造り、伊勢太廟造りなどは、それらの類縁をシベリヤの黒龍江畔に見出すことも出来る^(三〇)。

次ぎに衣服の點から觀ると、日本人の現在の衣服、即ち所謂キモノは甚だしく支那化されたもので、古代の服装は、大分これと制を異にして居り、上衣は窄袖で、下衣はズボンに似てゐた。女子の衣服は下衣がスカートスカートの如くになつ

てゐた。これと同様の衣服が、新羅の遺跡から發見せられた埴の彫刻に見られるから、古代に於いては日本人の服装と新羅人のそれとの間に差異がなかつたことが知られる(第一圖版B)。しかし、婦人の腰巻、男子の犢鼻褌、鉢巻の如き残存から見ると、インドネジャ族、印度支那族の影響を否定するわけにはいかない。

ともかくも、以上食住衣の三點から觀た結果では、日本人の生活の物質的三大特徴は南方系、北方系のもものが混淆して居り、それらを印度支那人、インドネジャ族、支那人、アイヌ族及びビツングース族の影響であるといふ風に私達は考へさせられる。

(三) 日本人の社會組織

日本人の社會組織には、多量のシベリヤ的香氣を嗅ぐことが出来る。日本人は家族を愛し、家族の延長である氏族を愛し、血屬的關係(Blood Relation)の上に立つた共同社會を營爲して、日本古代史の初めのページを飾つた。所謂『氏族制』の原形はさうした愛情を以て結合した共同社會の稱呼に外ならなかつ

た。神話や傳説には多量の母權的、母本的、母系的要素が社會組織の上に存在したことを示してゐるが、主として父權的、父本的、父系的制約を備へた家族制度を基調とした氏族制度であつたと思はれる。かうした氏族は自から地域とも一致して、血屬團は同時に地方群でもあつた。地方群の最小單位はムレ(後の村)であり、ムレの大なるものはコムレ(後の郡)であつた。コムレは即ちクニであつて、それはいはゞギリシャの村落國家(Village State)に似たものであつた。現在のシベリヤに住んでゐるツングースの家族、氏族、社會組織は日本人のそれに酷似してゐるので、私は社會的には日本人はツングース的であるといふことを主張しようと思ふのである。

(四) 日本人の技術

技術の上から日本人を見ると、創始性(Originality)には富んでゐないけれども、甚だ豊かな模倣性(Imitancy)を有つて居り、且つどんな原形をも自由に改造して、自分達の生活に適應せしめる適應性(Adaptability)及びそれを培養、生長せしめる可動性(Mobility)を有つてゐるので、接觸するところの異種族の技術を

採用して、自己の文化生活を豊富にした。これらの性能はツングース族に似て居り、特に其藝術的才能はツングース族中のゴルヂ族(Goldi)に似てゐる。

(五) 日本人の宗教

宗教に於いても日本人はシベリヤの新アジャ種といはれるツングース族によく似てゐる。ツァブリツカの『シベリヤ原住民』(Aboriginal Siberia)に現はれてゐるシベリヤ民衆のシャイマニズム(Shamanism)は、讀み進んでゆく一行毎に、それが日本の古神道について語つてゐるやうに私達を思はせる。これらの宗教思想を支那思想の影響のやうに主張するものもあるが、實際的な支那思想とはまるで異つてゐて、古神道は大方積極呪(Positive Magic)と消極呪(Negative Magic)即ち禁忌(Taboo)とから成り立つところの有生觀的、有靈觀的原始宗教であつた。原始宗教といはうよりは寧ろ呪的宗教(Magic-religion)であつた。後に儒教が入り佛教が入つても、根本的に此シャイマニスチックな考へを翻してしまふとが出来ず、寧ろ其民族性能から佛教及び儒教をもシャイマニイズして、神道的佛教、神道的儒教を出現させた。これらの點から觀て

も、日本人はツングース的であるといふことが出来る。

(六) 日本人の神話

神話の上から日本人を觀るともまた非常に困難である。何となれば日本神話には南方的要素と北方的要素とが混在し、それらは打つて一丸とせられ、一種の混合主義(Syncretism)に陥つてゐるからである。例へば『日本書紀』を繙いて見ると、私達は直ちに支那思想の影響を受けてゐるとに氣注く。同書の最初のページ、即ち天地開闢説話は殆ど全く『淮南子』の通りである。イザナギ、イザナミ、二神の國土經營説話以下が、恐らく日本人の固有の神話であつたであらうと思はれる。天孫降臨説話は蒙古族のゲシル・ボグト説話(二四)に似て居り、ホデリの命、ヒコホホデミの命の海幸山幸交換説話は、インドネジャ族の間に流布してゐる釣針紛失に基づく復讎説話(二五)と符節を合してゐることに氣注くだらう。インドネジャ族は白人系であつて、印度文化を大成して古代史に光輝を放つたアイルヤ族の一分派と見ることが出来、現在では南洋の諸群島に棲息して、原始生活を送つてゐるけれども、神話に於いては優秀な性能を

示してゐる種族である。それが多量の神話のプロットを私達の祖先に供給したことは疑ひの餘地がないが、同時に北方系の神話のプロットも可也に數多く發見せられ、かの世界に於ける最美最麗の説話といはれる白鳥處女説話の如きは、朝鮮半島を通してシベリヤ・ロシア線から我邦に輸入せられたと見なければならぬ^(二六)。また竹取翁の物語は、原型を印度支那の竹王の説話、即ち異型射精式説話であると觀なければならぬ^(二七)。日本神話の研究が一層進んで、それらが一々分析されて系統を明らかにするやうになつたならば、日本人の文化の人種的要素を明らかにすることが出來よう。かうした次第で、現在に於いては、日本神話はシベリヤ民衆——主としてツングース、印度支那人、インドネジャ人の影響を受けたといふ結論しか抽出されないが、それにしても尙ほ日本人種論に何らかの貢獻をする。

第四節 人骨

以上、私は體質的、文化的、併せて十二個の標準から、日本人種が複式人種であ

ることを規定した。これらの規準以外、體質の規定に必要なのは人骨(Human bones)であり、文化の規定に必要なのは人工遺物(Remains of human works)であり、兩者の規定に必要なのは文獻/Documents)である。其中、遺物及び文獻については他の機會に論ずることとして、こゝには人骨のみについて、極めて簡単に説明することにしよう。

(一) 人骨研究

我邦で發見せられた人骨は可也に多數で、其總數は少くとも七百數十例に上るであらう。そしてそれらは鈴木博士、足立博士、清野博士、小金井博士、長谷部博士、宮本博士などによつて研究され、其一部分は既に發表せられてゐる。清野博士が我邦で蒐集した日本古代人骨は、總數六百六十九例(石器時代人骨六三一例、古墳横穴時代人骨三八例)の多數に上つてゐるが、其中、三河國田原町吉胡貝塚で發掘されたものだけでも三百〇四例を算してゐる^(二八)。

清野博士を宗とする京都帝國大學派の古代人骨研究は、十數年間の連続した努力によつて多大の進出を見た。清野博士らの測定は精密を極めたもの

で、各骨各部の長さ、廣さ等の絶対數と絶対數相互間の百分比を計測し、計測各個の骨一つ一つの變差が平均數の價値に加はるやうな統計學的計算を行ひ、種族的統計を纏める爲めには次ぎの三つを研究する。

- 一 群の識別 (Kennzeichen einer Gruppe)
- 二 群の分解 (Analyse einer Gruppe)
- 三 群間の相互關係 (Stellung zweier Gruppen zueinander)

群の識別とは一群の人數について特殊事項を計測し、其特殊性質を決定することであつて、主として變異法則によつて $M\sigma$ 、及び E を計算し、且つ理想曲線(公算正曲線)を描寫する。

M は一群の特殊測定數の算術平均數で、變數 ($m_1, m_2, m_3, \dots, m_n$) を一つ一つ加へて、其總和 (M) を合計數 (n) で割ることによつて得られる。即ちそれは次ぎの公式によつて見られる。

$$M = \frac{m_1 + m_2 + m_3 + \dots + m_n}{n} = \frac{\sum m}{n}$$

σ は變異の度合、即ち各變數が平均數からいくら離れてゐるかを明らかにするもので、それを標準偏差といふ。標準偏差は先づ測定値を序位的に縦に列ね、次ぎに頻數 (p) を記入し、次ぎに測定値と頻數とを乗じた積を記入し、其總和を p の總和 (n) で除した商 M に比し各測定値がいくら偏してゐるかを調べて、それ (M) よりの偏差 (a) を次ぎに記入し、更に a の正號と負號とを消す爲めに a を自乗した數 a^2 を次ぎに記入し、 a^2 に p を乗じた積 (pa^2) を次ぎに記入し、 pa^2 の總和 ($\sum pa^2$) を n で除して、其商の平方根を求めたものが標準偏差である。それは次ぎの公式で得られる。

$$\sigma = \pm \sqrt{\frac{p_1 a_1^2 + p_2 a_2^2 + \dots + p_n a_n^2}{p_1 + p_2 + \dots + p_n}} = \pm \sqrt{\frac{\sum pa^2}{n}}$$

v は偏差係數で、測定値の算術平均 M に對する百分比である。それは次ぎの公式で算出せられる。

$$v = \frac{100\sigma}{M}$$

Eは蓋然誤差で、測定數 n が多ければ多いほど誤差が少く、平均數に對する各個人の偏差度が強いほど誤差は多い。計測せられた一群の數の中、最大と最小とは $M \pm 3\sigma$ の中にあるから、 $M \pm \sigma$ には悉くEをつける必要がある。平均數に對するE、 σ に對するE、 σ^2 に伴へるEは、順々に次ぎの式で算出する。

$$E(M) = \pm 0.6745 \frac{\sigma}{\sqrt{n}}$$

$$E(\sigma) = \pm 0.6745 \frac{\sigma}{\sqrt{2m}}$$

$$E(\sigma^2) = \pm 0.6745 \frac{\sigma^2}{\sqrt{2m}}$$

Eの代りに m を用ひることがある。 m は算術平均の平均誤差で、それは次ぎの公式によつて得られる。

$$m = \frac{\sigma}{\sqrt{n}}$$

次ぎには理想曲線(公算正曲線)を作る要があるが、これは計測數が非常に多ければ、二項式曲線が現はれる筈であるけれど、計測數が少ければ不規則な形

状をしか示さない。其不規則な形状を見事な理想曲線に書き改める爲めにガウス氏の公式を用ひる。其公式は

$$y = \frac{n}{\sigma \sqrt{2\pi}} e^{-\frac{x^2}{2\sigma^2}} \text{ 或は } \frac{1}{\sigma \sqrt{2\pi}} \int_0^x e^{-\frac{t^2}{2\sigma^2}} dt$$

の如くであるが、これによつて換算すれば、無限の例を測定した場合に均しき二項式曲線が得られるのである。

次ぎには群の分解について述べる。多くの民族は血液が純粹でなくて、混淆してゐるから、民族を構成する各種族の性質が、交聯(相關)の法則によつて相關させるや否やを決定することが近道である。一種族の間に現はれる二性質の交聯には二色あり、一つは或性質が増加すると同時に他の性質も増加するもので、それを陽性(順性)交聯といひ、之に反して或性質の増加する時に他の性質の減少するものを陰性(逆性)交聯といふ。交聯の強さを知る爲めには、交聯係數(r)を算出し、其大きさによつて判断を加へる。交聯係數は次ぎの式によつて算出せられる。

$$r = \frac{\sum pa_a a_y - nb_b b_y}{n\sigma_a\sigma_y} \quad \text{或は} \quad r = \frac{\sum(a-X)(y-Y)}{n\sigma_a\sigma_y}$$

若し兩性質の間に陽性交聯、又は陰性交聯ある場合には、 $r=+1$ 又は $r=-1$ を示し、 r の値が陰陽兩性ともに一より小さければ小さいほど交聯が不完全なことを示し、若し $r=0$ となれば、除外例は別として兩性質間に交聯がないものと見て差支なし。

最後に群間の相互關係についていへば、普通には平均數の差を二群間の差と見做してゐるが、それは二群に固有の變異性を考慮してゐないから不完全である。變異性が大きければ大きいほど、二群の變異曲線 (Abweichungskurve) が離れて來る。型差 (Typendifferenz) 即ち群間の差 (D) は次ぎの公式によつて求められる。

$$D = \frac{1}{2} \left\{ \frac{(M_1 - M_2)100}{\sigma_1} + \frac{(M_1 - M_2)100}{\sigma_2} \right\} = 100 (M_1 - M_2) \frac{\sigma_1 + \sigma_2}{\sigma_1\sigma_2}$$

しかし此型差にも誤差があるから、次ぎの公式で計算される。

$$E(D) = \pm 67.45 \frac{\sigma_1 + \sigma_2}{\sigma_1\sigma_2} \sqrt{\frac{\sigma_1^2}{n_1} + \frac{\sigma_2^2}{n_2}}$$

一群の民衆の種族的特殊事項を並べて、一目瞭然たらしめるにはモリソンの變差曲線を描くのが好都合であるとせられる。

以上三つの方法は、單に人骨のみならず生態に對しても用ひられる。しかし餘りに煩はしく、且つ材料を獲ることが困難なものや不可能なものがある爲めに、主として生態について前々節で述べたやうな方法で、日本人種を規定することが最も廣く行はれてゐるが、若し出来るならば綿密な統計學的計算のよりよいことはいふまでもなし。

(二) 人骨研究の結果

清野博士は自分と他の學者との報告に憑據して、頭蓋骨の計測に基づいた現代北海道アイヌ(A)、現代畿内日本人(J)、津雲石器時代人(T)、相互間の關係を、型差公式

$$D = \frac{1}{2} \left\{ \frac{(M_1 - M_2)100}{\delta_1} + \frac{(M_1 - M_2)100}{\delta_2} \right\}$$

ぎの如きものである。『余等が上記の計數に據りて明らかなる如く、現存人種との間に斯く計りの差がある石器時代人民は、アイヌ人と同一種或はアイヌ類似人種だといひ得ない。日本石器時代人民は、少くともアイヌ人と似てゐるぐらゐの程度に於て日本人とも似てゐるのである。然も同時に津雲人は現存人種とよほどかけ離れた體質を持つてゐる。之をアイヌ人と云はず、又日本人と云はずして、單に石器時代人民と呼ぶのが至當である。勿論此日本石器時代人民は現代アイヌ人及現代日本人の出現に對する基本人種の一部である』。

清野博士は更に古墳横穴から得た人骨に原史時代の民衆を、甕棺内發見の人骨に金石併用時代の民衆を代表せしめて比較研究した結果、日本石器時代人は一の祖型人種で、それからアイヌ人と日本人とに分岐したから、現存人種と比較にならぬ體質を具へてゐる。然るに石器時代末に、石器時代に徐々として混血が起り、其體質が漸次變化したから、金石併用時代人は現代日本人に近似してゐると同時に、石器時代人の性質を現代人よりも多分に殘留した

ものらしい。つまり縄文式土器を使用した石器時代民衆に、彌生式土器を輸入した他種族の血が混つたので、縄文式土器使用人種の血液は脈々として現代日本人に傳はつてゐるといふ結論に到達した。

清野博士らの人骨研究は松村博士の前記研究と共に、近代日本人の人種的要素を知る上に多大の貢獻をしたが、今日のところではまだ決定的な論斷が出来る程度に達してゐない。たとへば松村博士はアイヌ及び朝鮮人と日本人とは、頭骨示數及び身長に於いて距離が遠いといつたが、日本人中の多毛の個性及び群は、アイヌと多毛の點に於いて距離が近いと見なければならぬ。また清野博士は「 $T \rightarrow A + J$ 」と見られたけれども、「 $T \rightarrow A + J$ 」と逆に觀られないともない。現代アイヌも現代日本人も博士の認めてゐられる通り、祖先以來體質的變化をしてゐないのでなく、私達は夙にそれを認めて、それらの祖型に PA (Palae-Ainu) 及び PJ (Proto-Japanese) の名稱を與へてゐた程で、「 $T \rightarrow PA + PJ$ 」と觀てもよいと思つてゐる。これらの觀方は數學的のものでなく、全然歴史的のものである。それ故に、人骨以外の生態的體質をも考量し、更に歴史時代に於

ける文献と、先史時代に於ける遺物とを規準とするによつて、一層正確に近代日本人に出現を與へた人種的諸要素を還元しなければならぬと私は主張する。私達の現在の知識を綜合すれば、私達はやはり日本人を縄文式土器に代表せられる舊アイヌと、彌生式土器に代表せられる原日本人との上に、若干の印度支那人、インドネジャ族、支那人、少許のネグリト、其他の人種的要素が加はつたものと見ずには居られない。私は更に體質文化、二つの方面から、専門學者の研究した根本的な數字的、並びに數學的計算が世に出ることを期待し、且つ自分でもそれを具體化しようと思つてゐる。詳しく述べれば際限がないから、如上の叙述に一切を代表せしめて、私はもはや結論に入らうと思ふ。

第五節 摘要

日本人は混血民衆である。日本人を構成する人種的要素(Ethnic elements)として、私は次ぎの六種族を挙げ、外に尙ほ二三の種族を推想して見ることが出来る。

- (1) 黒膚、反唇、鬘毛の存在は、黒人種であるネグリト(Negrito)の動因を證明する。其移住年代は少くとも紀元前三千年以前であらう。
- (2) 近周に類縁を有たないアイヌ族の棲息は、其祖先即ち舊アイヌ(Palae-Ainu)の日本移住の非常に古いこと、其年代は、土地の堆積率から計算して、少くとも紀元前二千年頃であることを私達には認せしめる。
- (3) 體質並びに文化の兩側から、ツングース族(Tunguse)が日本群島に集團的移住をなし、それが日本人の基調をなしてゐることが證明せられる。其移住年代は舊アイヌより少し後れてゐるから、紀元前千八百年代よりも古くあるまらう。
- (4) インドネジャ人(Indonesians)が先島群島から薩隅半島などに上陸したことは疑ひの餘地がない。古史の『隼人』は即ちそれだ。
- (5) 印度支那人(Indo-Chinese)が南支那から九州地方に移住したことも明らかである。
- (6) 比較的晩れて、漢族、即ち原支那人(Proto-Chinese)が日本に移住した。そ

これは歴史時代までも續いた。

- (7) 其外、歴史時代に若干のマ、ラ、イ、種、族、(Malayans)も來たであらう。
- (8) 羅馬鼻及び猶太鼻の存在は、日本人の人種要素中に、間接或は直接に、さうした西方種の血液を混へてゐることを唆示してゐると見ることが出来る。
- (9) また非常な廣頭的動力の存在は、蒙、古、人、(Mongols)の血液の混淆を示すものと見なければならぬ。

私達日本人がかうした混血民衆であることは、自分達を單式人種であると思つた人々には、幻滅の悲哀を感じしめるかも知れないが、混血民衆は世代毎に劣性を失つて、優性のみを子孫に遺傳するから、今日の私達、即ち近代、日本人、(Recent Japanese)は如上の諸種族の優性から成り立つた優良種であると思なければならぬ。

日本人の體質^(三三)については足立文太郎博士が多年研究せられ、其結果、日本人が必ずしも悉く西洋人に劣つてゐないことを指摘せられたが、先年長與又郎博士もまた、少數の例ではあるが、日本人の腦重量を研究して、それらが寧ろ西

洋人に超えてゐることを指摘せられた。日本人の心力が歐米人に比較して、敢て劣つてゐないことは、最近の北米合衆國に於ける知名人士の能率發揮の統計から十分に證明せられる。私達は私達日本人の優性を飽くまで信じて、それを十分に展開せしめることによつて、一つは祖國の爲めに役立て、一つは世界の爲めに役立てたい。西洋人の自惚にたぶらかされて自らを卑しうするが如きは以ての外のことである。

引用參考書

- (一) 西村眞次、神話學概論、二五四——二五八頁。
- (二) cf. W. J. Perry. *The Megalithic Culture of Indonesia*, pp. 161—169.
- (三) 西村眞次、人類學汎論、二七七——二九二頁。
- (四) Herman Klaatsch. *Prähistorische Zeitschrift*, bd. i.
- (五) O. Hauser. *Urgeschichte*, s. 72.
- (六) A. H. Keane. *Ethnology*, pp. 142, 143.
- (七) Arthur Keith. *The Antiquity of Man*, p. 501.
- (八) R. B. Dixon. *The Racial History of Man*, p. 3.

- (九) A. C. Haddon. *The Races of Man*, p. 5.
- (一〇) Akira Matsumura. *On the Cephalic Index and Stature of the Japanese and their Local Differences*, p. 49.
- (一一) *Ibid.* p. 76.
- (一二) 鈴木文太郎、*人體系統解剖學*、卷一、二五五頁。
- (一三) A. C. Haddon. *op. cit.* p. 12.
- (一四) Akira Matsumura. *op. cit.* p. 80.
- (一五) *Ibid.* p. 98.
- (一六) 西村眞次、*體質人類學*、三二九三三〇頁。
- (一七) 同人、同書、三一七頁。
- (一八) Felix von Luschan. *Völker Rassen, Sprachen*, s. 187.
- (一九) C. Wissler. *Man and Culture*, p. 75.
- (二〇) 西村眞次、*日本稻作の人類學的研究*、文學思想研究第八卷參照。
- (二一) 同人、*日本古代社會*、一〇二——一一一頁參照。
- (二二) 同人、同書、六七、六八頁。
- (二三) 同人、*大和時代*、二八〇頁以下。
- (二四) Jeremiah Curtin. *A Journey in Southern Siberia*, p. 127 中、日本文のものでは西村眞次、

大和時代、五一——五一三頁、及び日本古代社會、一四九——一五六頁を參照するがよ。

- (一五) R. B. Dixon. *Mythology of All Races*, vol. ix, p. 167.
- (一六) 西村眞次、*神話學概論*、三〇〇頁以下。
- (一七) 同人、*萬葉集の文化史的研究*、三七三——三八二頁。
- (一八) 清野謙次、*日本石器時代人研究*、四一九頁以下。
- (一九) 同人、*民族論考古學講座*、六八頁以下。此書に載つてゐる公式は、多分誤植であらう、頗る杜撰で、數學的には無意味であるから、私はそれらを一々訂正増補し、また理解を容易ならしめる爲めに、任意に記號を修正して紹介することにした。此事は原著者の承認を得たいと思ふ。
- (三〇) 同人註(二八)同書、五〇——六二頁參照。但し五四頁△JAT、≡は脱字があるから修正を加へて置いた。

- (三一) 同人、同書、八五、七〇、七一、七二頁。
- (三二) 日本人の種的地位については、拙著、*大和時代*、五八——二七一頁、及び日本古代社會、四四——五九頁を參照せられたい。舊著の論述は、今日では其全部を承認することが出来ないけれども、大體に於いては目下の考へと一致してゐる。日本人の體質的研究は、如上の二書のみならず、此書さへもが著はされた後に發表された

もので、私の記述も多少訂正さるべき部分を生じたのであるが、全體の組織を變へるほどのことはなく、若干新學説を紹介して、二三年間の人種學的進出を髣髴せしめるに止めた。此問題に興味を有たれる讀者は前掲の外、是非とも下記の書物を讀まれたい。小金井良精、人類學研究。長谷部言人、先史學研究。清野謙次、日本原人の研究。鳥居龍藏、有史以前の日本。沼田頼輔、日本人種新論。

(三三) 足立文太郎、日本人體質之研究、四一——七五頁。

第四章 國家論

第一節 國家起原に關する諸説

日本國家の成立については、『古事記』、『日本書紀』に歴然たる記載があり、もはや些かの疑ひもないやうであるが、兩書は古代の編述に係り、必ずしも正確な科學的考察を経たものでないから、それらをありの儘に信ずるとは、今日の科學的頭腦を有つたものには不可能である。そこで最近、我國家の起原について色々の説が起つてゐる。

普通の傳統的解釋に従へば、日本國家は神權國家であり、一般の歴史的解釋に従へば、征服國家であり、また最近の理念的解釋に従へば、契約國家である。私達はこれらの中どれに従つたらよいであらうか、或はどれにも従ふことが出來ないだらうか、更に或はどれをも信じてよいであらうか。此問題を解決

しようと思はゞ、日本國家の成立の科學的研究が必要である。先づ如上の三説について略説して見よう。

(一) 神權國家説

國家起原論の中、古くから廣く行はれた學説は神權説、一に神意説 (Theory of Divine Origin) とすつて、國家を以て神の建設したもの、或は神命によつて建設せられたものとするもので、ボシエール (Bossuet) やシュタール (F. J. Stahl) やは其近代的代表者である。我國家の成立起原は、果して此學説で説明がつくだらうか。

試みに我邦の神話を検討して見ると、國家の成立には神意が重大に働らいてゐる。誰れしも知つてゐる如く、高天原の統治者たるアマテラス大御神が、孫に當られるニニギの尊に向つて、『葦原千五百秋之瑞穂國。是我子孫可王之也。宜爾皇孫就而治焉。行矣。寶祚之隆。當與天壤無窮者矣。』といはれ、此神勅を奉じて皇孫が高千穂峰に降られ、さてこそ日本國家建設の基が据ゑられたといふのが、記紀の記述してゐるところである。

アマテラス大御神は神々の中の最高神で、宇宙の總支配者たる位置にあるから、大御神の意志は結局神意である。神が自分の後裔のみが君臨し得る場所として瑞穂國、即ち日本を選んだといふことは、日本國の君主は神裔でなくてはならぬ、神裔でなければ統治権がないといふことを意味してゐるから、日本君主は所謂『帝王神權』(Divine Right of King) で、その統治下にはのみ國家的存在の見られた日本は、明らかに神權國家であるといふ考へが一般に有たれ、此觀念が我邦の歴史教育の基礎となつてゐる。それは神話 (Myth) の上では確實な存在で、餘程古い時代から一般民衆——少くとも寧樂時代の官僚貴族らの間には、歴史的事實と信ぜられてゐたことである。しかし、神話は飽くまでも神話であつて、歴史的事實ではない。神話は勿論空虚なものではないが、事實それ自身ではなくて、事實の反映に過ぎないものと見なければならぬ。

一部の學者中には、天孫降臨の神話を以て、日本だけのものとする人もあるけれど、それは明らかに間違ひであつて、人類の故郷を天界に求める天人説話 (Myth of Sky-People) は前述の如くインドネジャ族の間にもあり、また天孫が天

降つて國家を建設したといふ天孫降臨説話は蒙古族の間にもあつて、決して日本のみの特有ではない。蒙古のゲシル・ボグド (Gesil-Bogdo) の物語は、殊によく日本のそれと似てゐるのを見る。神を太陽に一致せしめる古代信仰から、神裔を太陽の子とする考へ、即ち日子觀 (Theory of Children of the Sun) は、エジプトに發生して世界に傳播したもので、どこにもさうした信仰の片割は残つてゐる。『天つ日嗣』の名稱は、かうした信仰と傳承とによつて起つたもので、最近にはそれを聖火保存の意味に取るといふ新説も起つてゐるが、日神が統を垂れるといふ考へは極めて古いもので、聖火保存説よりは、日神垂統説を正しいと見なければならぬ。天皇を『現神』と観る古代以來の民衆の考へは、天皇を日神の化身と見た結果であつて、日神垂統説でなければ説明がつかない。しかし、いづれにしても、神裔が國家に君臨するといふ考へは、神權によつて君主が國家を統治するといふ考へと一致するもので、さうした思想は忘れられた古代から今日までもつゞいてゐて、日本の國家は原始のまゝに少しも變化を受けてゐない。世界に國は澤山あるけれども、神勅によつて建設せられ

た國家が神權によつて統治せられ、遠古以來些の變化を起さなかつたところは、私の知る限りでは日本ばかりである。アビシニヤなどは國家の形態が異つてゐる。此意味に於いて日本國家はたしかに世界唯一である。

(二) 征服國家説

征服説、一に實力説 (Force Theory) といはれるのは國家を強者の弱者に對する支配形態と解するもので、昔はギリシヤのソクラテス以來、詭辯學派の人々によつて唱へられたが、近世に於いてはスピノザ (Spinoza) やフォン・ハルレル (Karl Ludwig von Haller) が其代表である。最近にはグムプロキッツ (Gumpłowicz) やラッツェンホーフエル (Ratzenhofer) が國家を以て征服の所産であるといふ説を立て、實力説を科學的に立證しようとした。グムプロキッツに従へば、少數より成る優秀群が多數群を征服して、其上に支配の政治的基礎を置いたもので、今日も尙ほ征服者と被征服者との關係が社會的階級に殘存固定し、其上に政治の統制機關が維持されてゐるといふのである。^(五)

此説を基礎として我國家の起原を再吟味して見たらどうか。現に記紀を

觀ると、カムヤマトイハレビコ天皇神武以來、日本の天皇は諸地方の酋長を征討して皇威を張り、國家の勢圏を擴大したといふ記述があり、また支那書、例へば『宋書』にも倭王武の上表が載つて居り、それには『東征毛人五十五國』西服衆夷六十六國。渡平海北九十五國』とあるから、倭の王室が武力を用ひて異種族を征服したとが、日本國家成立の起原をなすものであると見られぬでもない。例へば高橋清吾教授の如きは、原住民が日本群島に占居して尙ほ未だ國家を成さなかつたところへ、天孫民族が朝鮮半島から移住して先住民族の住居領域を中斷し、征服によつて日本國家を建てたと論斷してゐる。（毛）かう觀て來ると、征服起原説も決して空虚なものでなく、歴史的事實に當てはまるといつても差支へない。一體國家起原論としては、現在に於いては征服説は有力なものであり、一般に信ぜられてゐるのみならず、さうした實例が世界歴史に多いので、我國の起原もまた征服であるといふ風に説く學者が多いのである。

しかし、心理學的に考察したならば、征服は國家構成の動機にはなることが

あつても、因子とは絶対にならないと私には思はれる。國家は色々と抽象的に定義せられるであらうけれども、具體的には治者と被治者とから成り立つものであつて、兩者が相反撥して居れば國家は成り立たない、既成の國家でも崩壊せざるを得ない。學者の中には國家と社會とを全然異つたものと見、従つて國家は『力』を主體とするものだといつてゐるが、日本國家は直接に武力の壓迫によつて成立したものでなく、主として平和の勸説によつて成立したものであるから、これを征服國家と觀することは出來ない。素より若干の武力征服があつたことは否認出來ないが、平和勸説が主要な因子として國家構成に働いたと主張したのである。出雲の國譲り神話の如きは明らかにさうした民族理念を反映してゐるもので、それによつて日本國家成立の過程が證據立てられると私は信ずる。

(三) 契約國家説

國家は神意によつて形成されたものでもなく、また征服によつて構成されたものでもない。國家は契約によつて治者と被治者との二階級に分れた民

衆が建設したものであるといふ風の社會契約(Social Contract)を以て、我國家起原に擬してゐるものがある。神權國家を至上の國家形態とする人々からは、契約國家説は蛇蝎視せられてゐるけれども、實際の歴史的事實から観ると、日本國家の成立は契約説に近いものであると私は考へる。

抑々契約説はギリシャの昔から存在したところの國家學説であるが、近世に於いてこれに自然法學的改造を與へたのはホッブズ(J. Hobbes)、ロック(J. Locke)、ブーフエンドルフ(Samuel von Pufendorf)、ルソー(J. J. Rousseau)などである。たとへばホッブズの如きは人類は自然状態に於いては各個に對して戰鬥状態にあつたが、それから次第に平和状態に移らんが爲めに各自獨立の自主權を抛棄し、或個人または團體に其主權を讓渡する契約をなし、それによつて國家が成立するに至つたと説く。然るにルソーは此考へに修正を加へて、各個人が自由權を個人または團體に讓渡したのではなく、契約に加はつたところの民衆の總意に服従することになつたのである。個人の行動の規準として出現した法律が、民衆の總意に依存してゐるのはこれが爲めであると説

いた。

そこで、かうした考へ方から日本國家の成立を觀たらどうなるだらうか。

神話や傳説や土俗や文獻を綜合して考へると、日本國家を統治する主權者は、遠古以來、武力を主とせず、愛情を主として政治した。後には絶對的世襲的、神權的になつたけれど、初めには推舉(Election)の形式を取つて、主權が確立したと推定すべき幾多の證據がある。而して推舉は一種の契約である。日本民族の根柢をなしてゐる種族はツングース族であり、其古代的小國家の支配者たる『大人』(Kagan)は、推舉によつて就任したことが『魏志』の鮮卑傳によつて明らか⁽¹⁰⁾に知られる。またシベリヤに残存してゐるツングースの政治的形式を見ると、氏族長の代表會議によつて決定せられたことが實行に移されてゐる。日本神話を深く検討すると、八百萬の神々が高天原に神集ひに集ひ、神謀りに謀つて、多數決で最善と認めた事項が實施せられたやうである。高天原の神謀りは、シベリヤのツングース族のムニヤク(Munyak)と呼ばれる議會⁽¹¹⁾と同一性質のもので、明らかに統治の代議制的性質を帯んでゐたことを示してゐる。

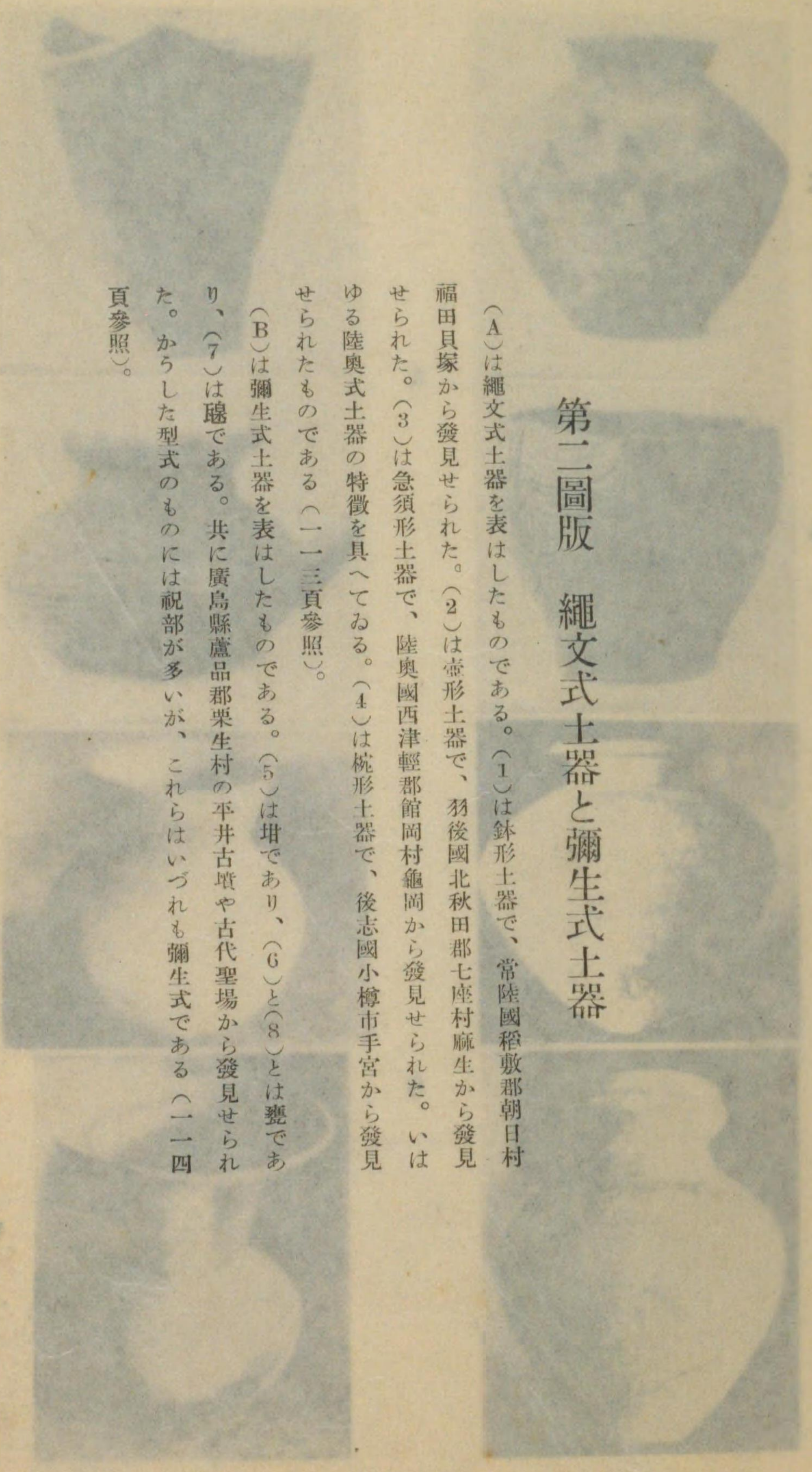
かうした理由で、三説の中、どれが一番日本の國家起原に近いものか、と問はれたならば、私はそれを契約説だと答へたい。しかし單純な契約とは異つて、いくらか現今の自治制に近い代議國家であつたやうに思はれる。學説は多く時代思想の反映であつて、近世の征服説などは帝國主義思想に影響せられたもの、帝國主義思想はもつと根本的な鬭争觀に影響せられたものと見ることが出来る。契約説がルソーらの自由民權思想に胚胎したことはない。神權説はギリシヤ以來の宗教的要素を帶んだ思想の影像で、原始時代の幼稚な色彩が漂つてゐるのを私達は見るといふまでもない。さうした時代思潮の影響から離れて、科學的に國家の成立を痕づけることが、新文化史家の任務であることはいふまでもない。今、私は、文化人類學的方法を以て、日本國家の成立過程を冷靜に研究し、それを歴史的事實に還元して見たい。

第二節 家族國家説

私がこゝに採らうとする文化人類學的方法 (Cultural-Anthropological Method)

第二圖版 繩文式土器と彌生式土器

(A)は繩文式土器を表はしたものである。(1)は鉢形土器で、常陸國稻敷郡朝日村福田貝塚から發見せられた。(2)は壺形土器で、羽後國北秋田郡七座村麻生から發見せられた。(3)は急須形土器で、陸奥國西津輕郡館岡村龜岡から發見せられた。いはゆる陸奥式土器の特徴を具へてゐる。(4)は椀形土器で、後志國小樽市手宮から發見せられたものである(一一三頁參照)。(B)は彌生式土器を表はしたものである。(5)は埴であり、(6)と(8)とは甕であり、(7)は甕である。共に廣島縣蘆品郡栗生村の平井古墳や古代聖場から發見せられた。かうした型式のものには祝部が多いが、これらはいづれも彌生式である(一一四頁參照)。



といふのは、考古學、社會學、土俗學、言語學、工藝學の五方面から研究して得た結果を綜合して、歴史的事實を再現するところの方法である。しかし、それらの結果について、一々詳述することは事情が許さないから、私は極めて大まかにそれらを部分的に論述しよう。

(一) 考古學的考察

考古學 (Archaeology) の上から我邦の遺跡を見ると、忘れられた古代に於いて、群島内に少くとも二種の種族が住んでゐて、相異つた文化を有つてゐた。一つは私が舊アイヌ式 (Palae-Ainu type) と名づけるもの、他は原日本人式 (Proto-Japanese type) と名づけるものである。

舊アイヌ式遺物は木器、石器、土器、並びに貝塚、竪穴、及び其他の遺跡から出土する動物の遺物などの總稱である。石器には石鏃、石斧、石臼、石杵、石槍、石槍、石、石匙などあり、多くは打製であるが、磨製のものも可也に數多く見出される。土器は色が暗褐色で、上縁に突起があり、無文のものもあるが、文様があれば曲線型のものが多い (第二圖版 A)。動物の遺物には諸種の貝殻、鹿角、猪牙、魚骨、鳥

骨、獸骨などがある。これらの遺物を出す遺跡は、貝塚、竪穴、遺物包含層、遺物散列地などで、貝塚には長さ數十間、高さ數間に及ぶものがあり、しかもそれがいくつもくゞ續いて存在し、また竪穴は何十箇も連續して發見せられるところから推すと、群團をなしてゐた數が可也多く、聚落も相當に發達してゐたことが知られる。

原日本人式遺物は、石器、土器、珠玉、埋葬品等から成立する。石器は顯著な特徴を認めないけれども、片刃式のものが多く、土器は褐色、無把手で、文様があれは直線型である(第二圖版B)。動物の遺骨は舊アイヌ式と大差がない。此式の遺物に於いて特に顯著なのは埋葬の遺物で、我邦の考古學者が一般に『古墳』と呼ぶところの巨石墳家である。巨石墳家は、大和地方に一番多く、しかも其構築が壯大である。出雲地方にも相當に多數の古墳群があり、また日向地方にも少なからざるそれを見るから、それらの地方には遠古に於いて大きな聚落があつたといふことが推想せられる。巨石墳家は上野あたりを北極として、それより以北には甚だ數が少いので、原日本人の勢圏が遠く北東地方

に及んでゐなかつたことが知られる。遺物として多く出るのは埴輪土偶で、それによつて原日本人の服裝、容貌等を還元することが出來、舊アイヌ式遺跡から出る土偶と、服裝、容貌が全然異つてゐるので、兩種族の生活様式の差異を知ることが出来る。

これら兩型式の遺跡、遺物の分布を調べると、兩種族の遠古に於ける聚落の状態、生活の様式が、おぼろげながらも明瞭になる。遠古に於いては、舊アイヌも原日本人も共に狩獵生活(Hunting life)を送り、海岸及び湖岸に住むものは漁撈生活(Fishing life)を送り、鳥獸魚介の肉によつて生活を主として支持し、草實樹果を副食物としてゐたことが確實で、經濟生活から云へば、彼等は共に食物採集時代(Age of Food-gathering)にあつたといへるし、文化生活から云へば、石器時代(Stone Age)にあつたといふことが出来る。

若干の舊アイヌ式遺跡及び原日本人式遺跡からは、彼等が稻を耕作してゐたと見るべき遺物が發見されるから、食物採集時代から徐々に食物生産時代(Age of Food-Producing)に移りつゝ、あつた過渡期の存在が認められる。原日本

人の巨石墳家は、時間時代からいへば舊アイヌの石器時代よりも大分後でもはや彼等が農業を經營しつゝあつた時代であると考察せられる。

狩獵時代に於いては、民衆は漂泊するのを原則とする。勿論、地帯の果てから果てへといふ風の漂泊はしないが、一溪谷内を螺旋式に漂泊して鳥獸を獵獲し、それによつて主なる衣食の原料を得た。狩獵民衆は其食料の性質上分散的生活を送らなければならぬ。然るに農業民衆は一箇所に定住して、一定の地所を耕作し、一定の地所に播種し、收穫しなければならぬ。漂泊してゐては食料が得られない。かるが故に、農業時代に於いては民衆が集中し、食物の安定から人口の増加を來し、勢ひ聚落が發達して村落をなすに至つたと思はれる。そして考古學上では、さうした聚落が次第に發達しつゝあつたことが證明されてゐる。

(二) 社會學的考察

社會學(Sociology)の上から我邦の社會組織を考察し、人種學(Ethnology)の上からラッングース族の社會組織を見て、それらを比較して見ると、日本人の古代に

於ける本來社會状態を還元することが出来る。今日ではもはや大分消滅したけれども、つい近頃まで邊鄙な土地へゆくと大家族を擁した家があり、一家に二夫婦も三夫婦も住んでゐたものがあり、また一つの村落が悉く親類で、一つの氏から成つてゐるものがあつた。前者はこれを大家族制(Gross Family system)といひ、後者はこれを一氏村(One-clan village)といふ。大家族制とは分家をするとなしに、何世代も一つの家に住む制度である。たゞ無限に大きな家を作ることには出来ないから、一軒の家に住み切れなくなると、主家の外に從家を造つて、餘剰の人員をそれに住ませることにする。主家は之を母屋といひ、從家は之を脇屋といつた。主家も從家も悉く同一の血液を傳へてゐるが、人口が増加すれば一二の主從家では住み切れないから、更に無數の脇屋が造られなければならぬ。無數の脇屋が一つの溪谷に臨んで建ち並べば、それが即ち村落となる。かるが故に一村は即ち一氏なのである。社會的に大家族は氏族に延長するといふことを、地理的に家は村落に延長するといひ現はすことが出来るのである。⁽¹¹³⁾

シベリヤに残つてゐるツングース族の社會を見ると、彼等は非常に家族を愛し、氏族を尊び、家を離れて移住するやうなことはなく、己むを得ず移住しなければならぬ場合に於いては、必ず家族を携へて共に本貫を去ることにする。氏族の群を離れることになつても、決して自分達の屬する氏族を忘れるやうなことはない。^(一四)

此點に於いて日本人及び朝鮮人はツングース族に似てゐる。朝鮮人はどこへ移住しても、自己の所屬する氏と、其氏の發祥地とを忘れない。知らぬ人同士がどこかで何らかの機會に逢つた時の挨拶は、一例すれば甲が『あなたはどなたですか』と聞くと、『私は慶州の孫です』といふ風に乙が答へる。慶州を離れてどこにゐても、單に孫といふ氏を名乗るだけでは満足せず、必らず『慶州の』といふ説明語を加へることにしてゐる。

日本人にしてもさうで、其出身地を尊重し、其出身について矜誇を有つてゐる。古いところで例を引けば、オホタタネコが崇神天皇に謁見して、名を問はれた時の答へに、『あはオホモノヌシの大神、スエツミミの命の女イクタマヨ

リビメに身合ひて生みませる御子、名はクシミカタの命の子、イヒガタスミの命の子、タケミカツチの命の子、おのれオホタタネコ^(一五)』といつたといふが如き、四代の祖先の名を一々列舉してゐる。近いところでは、試みに『源平盛衰記』を繙いて見たまへ。一ノ谷の戦に子の景季の行方を求めて取つて返した梶原景時は、『相模國の住人鎌倉權五郎平景政が末葉梶原平三景時ぞ。彼の景政は八幡殿の一の郎黨、奥州の合戦の時右の目射られながら、其矢を抜かずして當の矢を射返して敵を討ち、名を後代に留めし末葉なれば一人當千の兵ぞ。子息景季が行方覺束なくて返し入れり。我れと思はん大將も侍も組めや組めや』と名乗つてゐる。齋藤眞盛に向つた手塚太郎は『誰人ぞ只一人残り留つて軍し給ふは、大將軍か侍か心にくし、名乗れ。かく申すは信濃國諏訪郡の住人手塚太郎金刺光盛と云ふ者なり、善き敵ぞ名乗り給へや組み給へ』と名乗を揚げてゐる。^(一六) これなどは日本人が後代までも氏と其本貫とを尊重したことの立派な證據である。

遠古に於いてツングース族が南下運動を起して、我日本群島に移住した場

合には、恐らく幾家族かの集團である一氏族を單位として、集團的移住を試みたと思はれる。移住が既に集團的であつたとすれば、聚落は最初から相當に發達してゐたと見なければならぬ。石器時代の移住は、堅固な船舶がないから、多數が一時に来ることは出来なかつたらうけれど、それでも最小單位は一家族であつたと見なければならぬ。

(三) 工藝學的考察

工藝學 (Technology) の上から我邦の建築を見ると、いくらか古代の家族生活の状態を還元する材料になる。地方へ行くと、周圍に籬或は垣を繞らし、其中央に正面に於いて門を作り、門の突當りに母屋を造り、母屋の前方左右に脇屋を建て、倉庫其他を母屋の後方に建てたものが多く見られる。此建築群の設計は餘程古い時代からの傳統的設計と見えて、それが大體に於いて伊勢太廟の建築群と似てゐる。太廟の建築布置は恐らく遠古に於ける大家族制時代の家の建築布置を其儘に傳へたものであつて、少くとも社會上に權力のあつた大氏族長の住宅を髣髴せしめると私は信じてゐる。これを滿洲などのツ

ンゲーエス的建築設計に比べると、大體のプランに於いて相類同してゐる。前に門あり、周圍に土垣あり、門の突當りに母屋あり、左右に脇屋あり、屋の構造は大分日本の神社建築と異つてゐるが、門の如きは全く鳥居式で、沖繩に残存してゐる鳥居とよく似て居り、日本の神社の鳥居が古代の門の形式であることを私達に想像せしめる。かうして私達は、古代に於いて既に相當な人數を收容するに足りる大建築があり、そこに幾家族も住んだ氏族制時代の民衆の社會生活の有様を還元することが出来る。

(四) 土俗學的考察

土俗學 (Ethnography) 特に神話學 (Mythology) の上から、私達は或程度まで日本人の古代社會と國家との形態、組織を窺知することが出来る。第一に結婚は一夫多妻 (Polygamy) であり、繼承は父系的 (Patrilinear) であり、支配は父本的 (Patri-local) であつたといふことが記紀の記述で知られるが、よく調べて見ると、多くの母系的 (Matrilinear) な母本的 (Matrilocal) な要素を神話の中に見出すことが出来る。一例すれば神々の中で一番主要な神は女性であるアマテラス大御神

であり、胸形の君が祖神として齋き祭つた神々はタギリビメ、イチキシマビメ、タギツヒメの三女神であり、媛女君の祖神もアメノウズメの命であるが、前者は母權 (Mother-right) の強かつた時代、婦人家長制 (Matriarchy) の存在を示すものであり、後の二者は繼承が母系に沿うて傳へられた母系繼承 (Matrilinear descent) を示すものである。そこで日本人は比較的新らしい時代まで母系的、母本的の社會生活を營んでゐたと思はれる。

神話や傳説は本來それが書記された時代よりも、それに先行する時代を反映するのが普通である。紀記の編纂された寧樂時代以前に日本が既に父權時代を迎へてゐたとすれば、母權時代の生活を營爲したのはそれ以前であるといふ結論に私達は導かれねばならぬ。

記紀の示してゐる社會組織は、いはゞ氏族制 (Clan system) であつて、民衆は主として血縁 (Blood-relation) を以て衆團を作り、或一地方に占居してゐたが、血縁以外に社會の落伍者を家族と見做して家族内に收容し、それを『家の子』と稱してゐた。即ち記紀の反映する社會組織は、主として血縁によつて衆團を作

つた純粹血屬社會から、世縁 (Social relation) によつて衆團を作るところの準血屬社會の時代に推移しつゝあつたことを私達は學ぶのである。

此血縁を擴張して世縁による社會を作つたといふことが、國家構成の主要な因子となつたのである。

平安時代に出來たものだけ、『姓氏錄』を見ると、古代からの傳統的な社會組織がよく分り、また國家を構成する一要素としての臣民と、他の要素としての君主との關係がよく分る。それによると日本國家を形成する民衆は三階級に分れた。

一、皇別はアマテラス大御神の系統から出て、後世オミ(臣)或はマヒト(真人)と呼ばれたもので、天皇、廣くいへば皇室と血屬關係にあるものである。

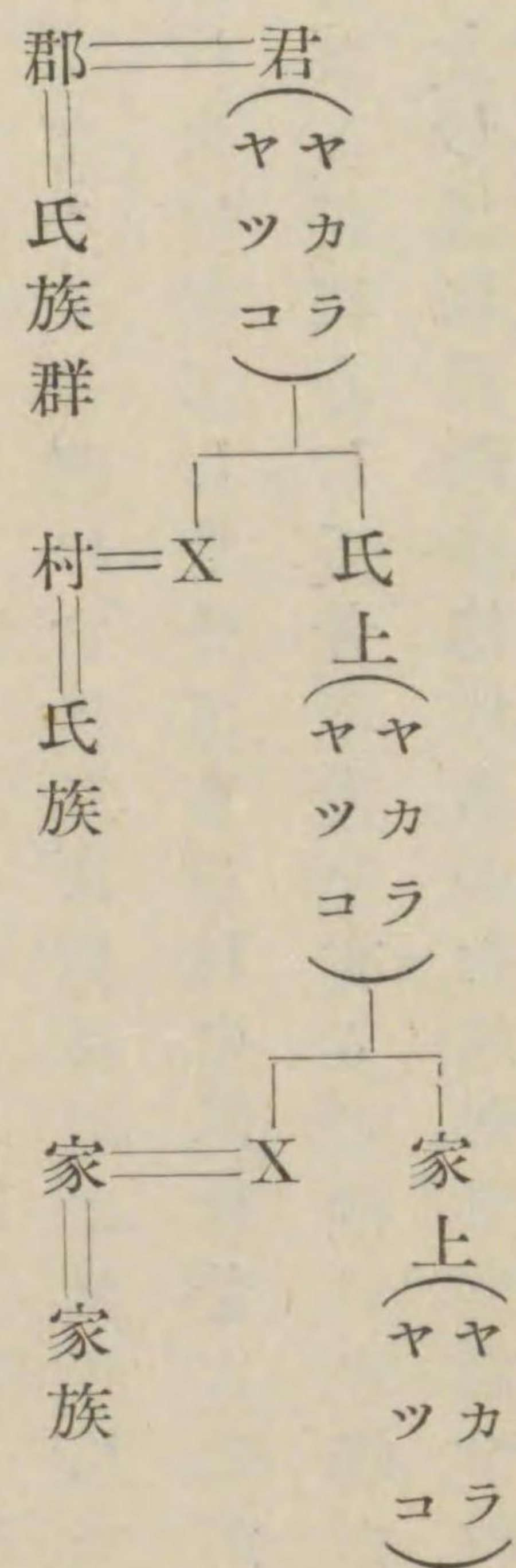
二、神別は天孫降臨と同時に、或はそれより以前に日本に占據してゐたもので、皇別と同種ではあるけれども、近い同一血屬ではない點が異つてゐる。八百萬神は大方神別であつて、それに天つ神派と國つ神派との二階級あり、共に神別になつてゐるけれど、天つ神派は天孫と同種であり、國つ神派は異種であ

つたと考へられる。後世ムラジ(連)或はアソミ(朝臣)といはれたのは皆神別である。

三、蕃別はクマツやエゾの如き異種族で、天孫以前から日本に住んでゐた原住民である。

社會の最小單位は家で、家がいくつもとよると氏になる。氏には大小あり、多くは一氏にして一村或は數村に占居した。家は家の上が統べ、氏は氏の上が統べる。氏の上には家の上の中の最大なものがそれに任じた。家の上から氏の上を出した如く、氏の上の中から最大なものが選ばれて、すべての氏を統轄した。此總統轄者が即ち天皇である。天皇は、かるが故に、大にしては諸氏の上の總統轄者であると同時に、中にしては自己の屬する氏(皇族)の上であり、小にしては家(皇室)の上でもあつた。家の上は原則として家族及び準家族を統べた。家族はヤカラと呼び、準家族はヤツコと呼んだ。天皇が直接に支配するところのものは、天皇のヤカラとヤツコ及び自己の屬する皇族とであり、間接に統轄するものは諸々の氏であつた。

未だ眞正の國家が現はれなかつた前、日本には無數の小國家があり、それは首長がゐた。それらの首長は大抵地名を以て稱呼とし、ミヌマの君とかムナカタの君とか、アダの君とか、サ、キヤマの公とかいふ風に呼ぶのが常であつた。此『君』によつて支配さるゝ一地方群は、多くの場合に於いて血縁を有つた氏族群であり、其下に多數の家が含まれてゐるのであつた。社會と地理とを結びつけて圖表を作ると、大體次ぎのやうになる。



家はヤカラとヤツコの有機的集合であり、家の有機的集合は氏であり、氏の有機的集合は國である。國は郡と一致し、村は氏族と、家は家族と一致する。而していくつかの國の有機的集合は大國家であり、大國家の統轄者は君の中の徳望ある君であつたから、特にそれを『大君』と呼んだのである。ヤマトは

小國家であるが、それが小國家を統べて、後に日本帝國に發達した聯合國家を作つてからはオホヤマトと呼ばれたのは、此理由に依るのである。

(五) 言語學的考察

言語學 (Linguistics) の上から、日本國家の構成を窺ふと、一層其性質が明瞭になつて來る。言語は古代以來傳統的に繼承してゐる文化であるが故に、他の一切は失はれてしまつても、そのみは昔さながらに、或は多少變化して殆ど昔のまゝに残存して、昔の姿を有りの儘に私達に示す。それ故に古代文化の證明としては言語は他のものを超えて役立つのである。

イへはイハ(岩)と同一語原から出立したもので、昔、私達の祖先は岩石の下或は岩窟の中に住んでゐたことを示す。朝鮮語で家のことをチブといふが、チは屋根の義であるから、イブが家の義で、日本語イへの語根である。イブからイへ、イハへの變化は、Ipから一方は Ipe→Ife→Ihe となり、他方は Ipa→Ifa→Iha となつたので、沖繩には今尙ほ Iha(伊波)といふ氏が残つてゐる。イホ、イホリ(庵)、イハレ(磐余)、イハロなどは皆イブから分岐した語である。

イへの群がつたものをムレといふ。今日のムラ(村)はムレ(群)の進化形であり、昔はそれをコレといひ、またムレ、ムリ、ムル、ムロ、ブリ、ブル、ブルと呼んだ。『魏志』に現はれて來る韓の國名を見ると、牟婁、莫婁、卑離などがあるが、いづれも日本の牟婁、牟婁と等しくムレの意である。古代朝鮮では、それを弗、伐、夫里などと音譯してゐる。今日でも鮮語で *Maul* といふのは村のことで、全然日本のムラと一致してゐる。

ムラの集合したものを、古代ツングース語では *コムリ* といつた。コは大きいこと、或は美しいことを意味するから、コムリで『大村』の義である。コムリは一にコ・ブリとも發音し、それが日本ではコホリとなつてゐるが、朝鮮にも洞即ち *Kaul* の語が残つてゐる。コホリは支那語の『郡』(*Kun*)と一致してゐるので、それを日本化して使用し、語尾にイを加へてクニと呼んだのである。即ち $kun+i=kumi$ とさふ進化を見たのである。此證明によれば、昔の郡は國と同一物であつて、たゞ語原を異にしてゐるのみである。『魏志』の韓傳中に現はれて來る古離、狗盧、戸路などは、邦語のコホリと同原である。

イヘ、ムラ、コホリ、三様の小中大集團の統治者をカミといった。カミは上頭、神、守、髪など、共同の祖語から出たもので、共に『上位にあるもの』の稱呼である。キミ(君、或は公)の語もまたカミと同原であらう。キミに統治せられる臣民は、昔からタミと云ひ慣らしてゐた。安南語では君は *Quan* と發音し、臣は *Tam* と發音するから、古い安南語が入つて來たと考へられぬこともないが、キミはカミの轉訛であり、タミは垣を意味する鮮語タムにイの加はつたものとも見られる。ヤカラ即ち血縁の小集團であるところの家族群がいくつもあると、それをウヂ即ち氏族と呼ぶが、ウヂは古代に於いてはウチと發音した。即ち *uči* → *ndi* → *nji* の變化を経たもので、同一血屬團は其周圍に垣を作り、その内部をウチといつたが、鮮語ではカキ即ち垣をタム(*Tam*)といふから、それにイを加へればタミとなる。

ところが鮮語タムは日本語のタムロ、支那語の屯と一致し、ツングースでは天幕を意味するところの *chun*、蒙古では *tuun* となつてゐる。天幕をチユム或は古くはタムといつたから、それを張つて假泊するをタムロといひ、チユ

ムを統轄する首長をチユメラキミといつたのが、轉訛してスメラギ、或はスベラギとなつたので、統轄することをスベル、或はスメルといつた。スメラギはかるが故に、本來は『家の上』の義、スメルは統轄の義で、支配を意味してはゐない。日本君主のロールは古來シラスといひ慣らはし、ウシハク、或はヲサムともいつたが、最も普通に用ひられたのはシラスといふ語である。シラスとは *verwalten* といふ意でなくて、*wissen* といふ意である。支那にも『知事』などいふ官名はあるけれども、統治者、主権者の任務を『知悉する』とはいはない。若し日本附近で、これと類同した語を求めたならば、エスキモー族が、首長の人群を統治することを『知る』といつてゐるのと似てゐるだけである。中にはシラスの本義は精神的所有、即ち *Geistliche Habung* であるといふものもあるが、私はもつと意味が深く、周到な注意を拂つて、知らぬ限もないといふ意に取りたい。いはゞ權力で以て支配してゆくのでなくて、親が子に對するやうに獻身的に愛育するといふ意であらうと思ふ。

また古代の官名——或點ではカバネの名でもあるが——に大臣、大連、宿禰

などいふのがある。共に『大』は字義通り『大きい』といふ意、オミとムラジとはどういふ意味を有つてゐるかについて、先輩諸學者の間に色々の議論があつたが、私はオミはオモの轉訛であり、オホオミは大母の義であると併してゐる(至高官職を大母としたのは、母權時代の思想の痕跡が残つたものと見て差支へない)。またムラジは古代ツングース語の『美』を意味する mu と『老』を意味する om と『男』を意味する ni との複合で、結局オホムラジは大父と譯すべきものであると思ふ。スクネは『少』を意味する suk と『兄』を意味する yari との複合で、少兄即ち『弟』を意味する語である。既に大母、大父、少兄があれば、必ず大兄もあつたと思はれる。昔、皇子の名には中大兄、古人大兄など大兄とついでゐるのが多いが、これはワニと訓むべきで、スクネに對してワニといふ官職があつたやうに私には思はれる。天皇が其宗主權を實行せられるに當り、統治を代行せしめる臣僚中最も信頼すべきものを選んでオホオミとし、次ぎをオホムラジとし、更に其次ぎをスクネワニなどとなされたものである。これはつまり天皇が皇族でもない臣僚を御自分の母、父、兄弟に擬して任命さ

れたもので、政府は皇室の延長であるやうに、國家は家族の延長したものであつたことを證明する極めて有力な證據である。可也に久しい前から、日本の國家は綜合家族制の進歩型であるといふ人があつたが、何らそれらしい證明を擧げて居らぬ。けれども、此新らしい證據を提示すれば、日本國家の本質が家族、國家(Family State)だと云ふことは否認が出来なくなる。

第三節 宗教國家觀

どこの國でも、其原始時代にはいはゆる『宗教國家』の色彩を帯んでゐる。日本もやはり宗教國家から政治國家に進んだもので、其本來は宗教的形態を有つてゐたといふものがある。私は別にそれを否定しようとは思はない。『魏志』の倭傳を見ると、倭の女王卑彌呼の事を叙して、『事鬼道。能惑衆。年已長大。無夫婦』とあり、更に小國の官名を觀ると、『卑狗』(日子)、『爾支』(禰宜)などの宗教的名稱を見出すので、それらの日の統治が純粹な政治的のものでなく、著るしく宗教的色彩を帯んでゐたものであるとが知れる。また『古事記』

のミマキイリヒコイニエの命(崇神)の條に、妹トヨスキビメの命の御名を記し、註に『拜祭伊勢大神之宮也。』とあつて、はつきりと神鏡を倭に祭つたことが載つてゐないが、『日本書紀』には崇神六年にアマテラス大御神を倭笠縫邑に祭らしめたことが書いてあり、それから祭祀と政治とが分離したと一般にいはれてゐる。そこで、それ以前を祭政一致の時代、それ以後を政教分離の時代とするが、たしかに遠古に於いては政治は宗教と同格で、二つの間に差別のなかつたことは事實である。さうした國家を宗教國家 (Religious State) といひ、この邦でも初めはさうした時代があるものである。

フレーザは其著『金枝』(Golden Bough)に於いて、君主のマジック起原を説いて居り、ミッチェルの如きはマジックによつて名と富とを得た巫覡が、人智の發達につれてマジックの效果なきことが知れて來ると、マジックの仕事専門の巫覡に譲り、社會的統制のみを自分の仕事としたものが王であるといふ風に説いてゐる。なるほど王の起原としては、さうしたこともあり得よう。我邦に於いても初めは祭政が一致して居たが故に、『政治』を意味するマジック

ゴトは、『祭祀』を意味するマジックにゴトをつけて兩者を區分しただけのことであつて、宗教から政治が分離したものであることには疑ひの餘地がない。すべて家長は一家の呪的宗教的行事を執り行つたから、氏族長は氏族全體の呪的宗教的行事を執り行はねばならないし、各氏族長を統率するところの國家の首長は、國家總體の儀式に際してその執行者となることは當然で、後々の法律規則たとへば『延喜式』などに於いても神社のことが真先に規定せられ、天皇のロールは祭祀を主としたことが十分に想像せられる。しかしながら、日本國家がさうした宗教的色彩を當初に帶んでゐたとしても、家族國家たる本質に於いては何らの變りもないわけである。むしろ宗教的色彩を帶んでゐたところに、家族國家としての特色が現はれてゐるといつても差支へないほどである。

以上、私は文化人類學の五側面から日本國家の性質を考へて、家族國家で日本の國體があることを論證したが、それらの證據の提示によつて導かるゝ結論は次ぎの如くである。

第四節 摘要

結論として私は、日本は家族國家であるといふことを主張すれば足りるが、今少し詳しく日本國家の成立の過程^(三四)を具體的にいひ現はして見たい。

(1) 日本國家の要素である民衆は、舊アイヌ、ツングース(原日本人)、印度支那人、インドネジャ人、ネグリト、漢人等を含んでゐるが、其中基調をなしてゐたツングース族が最後の優勝的地位を占めた。

(2) 初め日本群島には、共同社會(Community)がそこゝに在り、其首長は絕對の權力を有たなかつたが、農業の採用以來、次第に漂泊生活から定着生活に移り、住所の固着は家族の發達を來し、血縁による鞏固なる氏族群の出現を見た。

(3) 氏族群は地理的に觀れば地方群であり、所謂「一氏村」を形成した。氏族群の首長には氏族中の徳望ある家族長が任じて、他の氏族群に對して自己の所屬氏族群を代表した。

(4) 各氏族長は追々に親近して聯合的に小國家を形成した。それらの小國家中には出雲、吉備、日向、大和などいふ比較的大きなものがあり、出雲國家の如きは、一時其統制下に多數の小國家を有つてた。

(5) 最後に大和國家が群島の中部から西部に亘る諸小國家を併合して、オホヤマト國家を構成した。オホヤマト國家の人民は、必ずしも悉く血縁を有たなかつたけれども、世縁のものも之を血縁と見做した。それ故にオホヤマト國家は家族の延長したものであり、主として征服や神權によつて成立したものでない。

(6) オホヤマトが後の日本帝國に發達したので、政體は其後種々に變化したけれども、國家形態は原始の儘に保存されて來た。建國以來國體を原始の儘に保存して、今日までも連続してゐる國家は世界にない。それが日本國家の唯一無二の差異性である。

かうした差異性を有つた國家を構成する一要素としての民族の一員の地位を私達の各々は占めてゐる。私達の祖先もまた私達と同じ關係を此國家

に有つてゐた。私達の祖先が、それをより真なる國家、より善き國家、より美しき國家にしようとして、幾十世紀に亘る永い努力を續けた結果、遂に今日の日本國家を見るに至つたのである。日本の日本から東洋の日本へ、東洋の日本から世界の日本へ、段々と其位地を向上せしめた私達の祖先以來の民族的努力は、今後も永く續けられて、存在の意義ある國家に此日本を改造し、生育しなければならぬ。『金甌無缺』といふやうな子供らしい誇りを棄て、私達は正直に赤裸々の日本を眺め、ひとり日本自身の爲めのみならず、世界の爲めにも役立つ日本を出現せしめねばならぬ。そこに眞の愛國心があるのだ。

しかし、そこに忘れてならないことがある。それは日本國家の美しい成り立ちである。愛と血液とを以て紐帶とせる基本社會を國家にまで發達せしめ、しかも尙ほ依然として愛と血液とを國家の紐帶としてゐる日本民衆は、人類協同の最好典型として、特殊史の上にも、一般史の上にも、はたまた人類文化史の上にも特記さるべき特異の民衆であると同時に、其理念及び理念の體現たる國家もまた人類科學の指示する最高理想の具體化として特記さるべき

ものである。それらを並行的におぼし立て、永久に生命あらしめることが、私達の負ふべき任務であることを日本文化史は私達に教へる。

引用參考書

- (一) 日本書紀、卷二。
- (二) Jeremiah Curtin. *A Journey in Southern Siberia*, p. 127 ff.
- (三) W. J. Perry. *The Growth of Civilization*, p. 183. cf. *The Children of the Sun*.
- (四) 堀岡文吉、國體起源の神話學的研究、五三頁以下。
- (五) Gumplovicz. *Allgemeine Staatsrechte*, s. 48.
- (六) 宋書、卷九七。
- (七) cf. Seigo Takahashi. *Study of the Origin of the Japanese State*.
- (八) Thomas Hobbes. *Leviathan*, 1651.
- (九) Jean Jacques Rousseau. *Du Contrat Social ou principes du Droit Politique*, 1762.
- (一〇) 三國志魏志、鮮卑傳。
- (一一) M. A. Czaplicka. *My Siberian Year*, p. 159 ff.
- (一二) 西村眞次、大和時代、四八——五七頁參照。日本の考古學的研究については、八木

辨三郎、日本考古學、後藤守一、日本考古學及び高橋健自、考古學を見られたい。

- (一三) 同人、同書、三六二頁以下。
- (一四) Bogoras, *The Chukchee*, p. 537.
- (一五) 古事記、中卷(崇神紀)。
- (一六) 源平盛衰記、卷三七、三〇。
- (一七) 新撰姓氏錄。
- (一八) 西村眞次、日本古代社會、一〇三、一〇四頁。
- (一九) 三國志(魏志倭傳)。
- (二〇) 古事記、中卷。
- (二一) 日本書紀、卷五。
- (二二) J. G. Frazer, *The Golden Bough*, p. 92.
- (二三) G. W. Mitchell, *Anthropology Up-to-Date*, pp. 55, 56.
- (二四) 西村眞次、前掲書、三四五頁以下参照。私はまだ日本國家の成立過程を詳しく書
てゐないが、此書に文獻學的研究の一例として、『魏志』の倭傳が取扱つてある。
完成された論文でないが、之に依つて研究の方法は分ると思ふ。一見されたい。

1730
7.2

第五章 時代論

第一節 文化時代と時間時代

在來の史學者は、記録(Records)を以て歴史と無歴史との境界を別ち、記録以後を歴史時代(Historic Age)と呼び、記録以前を先史時代(Prehistoric Age)と呼んだ。しかしながら、先史時代とても歴史があり、それを先史的歴史(Prehistoric history)と呼ぶことが出来るのであるから、此別け方は正しいものでないには相違ないが、記録のない歴史は正確な年代がわからず、それが發生してから初めて絶對の年代が知られるから、記録の有無を以て歴史を分けることも強ちに無理ではないと考へることも出来る。

かうしたいきさつは、主として時代(Age)の觀念が明確でないから起る。時代には二つの種類がある、一つは文化時代(Culture-age)であつて、他は時間時代

(Time-age)である。これらの二つは往々學者によつて混同されてゐるが、嚴密に區分すべきものであることをバアキットは指摘してゐる。文化時代とは、文化相(Cultural Phases)によつて時代を分つもので、素より前後の關係に立つてはゐるが、必ずしも年代と一致しないものである。たとへば考古學上でいふ石器時代、青銅時代、鐵時代の區別の如き、甲地では既に數千年前に石器時代を經過してしまつたのに、乙地では今尙ほ石器時代の文化相を有つてゐるといふ風に、時代區分の標準を文化相に置くものである。これに反して時間時代は文化相に拘はらず、ひとへに時間經過(Time-lapse)を標準として時代をわかつもので、いふところの年代學(Chronology)の對象である。若し後者を『年代』といふことが出来るなら前者は『文代』とでもいふことが出来よう。

時間時代にしても二色ある。即ち一つは絶對年代(Absolute)で、他は相對年代(Relative)である。前者は文書、或は金石文等によつて、明確に日附(Date)の知れるものであり、後者は前者の如き日附は知られないが、日附のあるものと比較して同一時代であることを知り得るものである。

第二節 先史時代

日本文化史の文化時代は、新石器時代に始まるといふことは、今日では學界一般の定説であるが、然らばその時間時代はどう決定せられるか。それについては從來發表せられた論文が甚だ少く、僅かにミルン(John Milne)が東京灣沿岸の土地堆積率から、大森貝塚の年代を計算したものと、中目覺氏が中央アジアの氣候變化が我邦の歴史に影響を與へたことを暗示したものがあつるばかりである。

無文獻時代の歴史的年代を決定することは容易でないが、地質學的研究、考古學的研究、氣象學的研究、文獻學的研究などを綜合して、相對年代を知ることが必ずしも不可能ではない。私は今、さうした方法で、日本先史時代の年代を窺つて見たい。

ミルンは先づ長元(一〇二八)——一〇三六、長祿(一四五七)——一四六〇、永祿一五五八——一五六九、寛永(一六二四)——一六四四、及び現代の江戸地圖を比

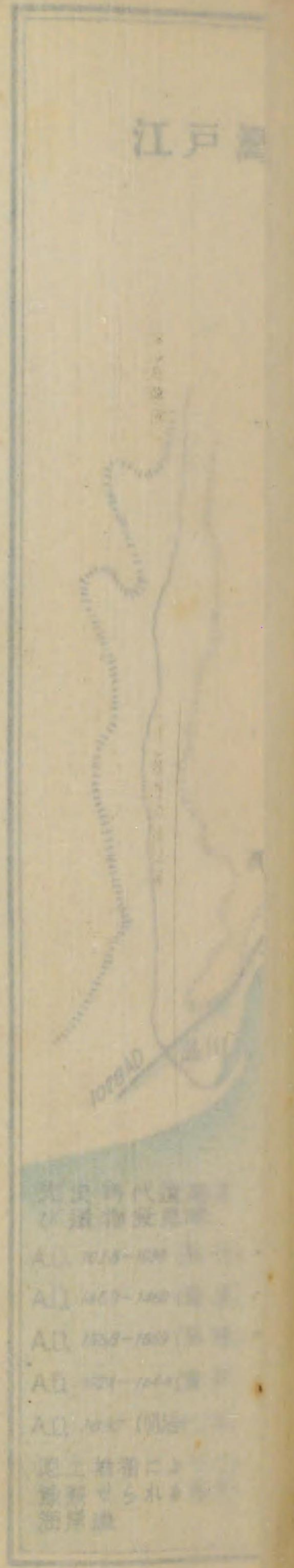
較して、其海岸線の變化を知り、隅田川、中川、多摩川によつて運搬せられる土砂が、それ／＼一年平均幾フィートあるかを割り出し、次ぎに大森貝塚が現在の海岸からいくら距つてゐるかを檢出して、其間の土地堆積に要する年數を求め、それを以て大森貝塚の海岸にあつた時代、即ち石器時代住民の生活を營爲した時代を推定した(第三圖版)。

ミルンに依れば、(1)一四五九年に於ける淺草から現在の隅田河口までの距離は四、二〇〇ヤードあり、四二〇年間にそれが出來たのであるから、土地の進出率は年平均三八フィートである。(2)一四五九年の江戸城下の海岸線から築地を貫いて現在の海岸線に至る距離は一、二〇〇ヤードで、年平均八フィートの進出率を示す。(3)一四五九年の芝海岸からの距離は三〇〇ヤードで、年平均約二フィートである。(4)一〇二八年の淺草海岸線からの距離は四、八〇〇ヤードで、それが出來るのに八五〇年を要したから、年平均一七フィートである。(5)一五五八年の船川の舊海岸線から、現在の海岸に到る距離は約二、四〇〇ヤードで、それを形成するのに三二〇年を要したから、年平均二二フィート

- (21) 久堅町
- (22) 傳通院 貝塚
- (23) 小日向臺町
- (24) 高田老松町
- (25) 牛込山伏町三番地
- (26) 佐土原町貝塚
- (27) 九段阪
- (28) 宮城内紅葉山
- (29) 永田町
- (30) 永田町
- (31) 津守新阪
- (32) 鮫ヶ橋
- (33) 芝江美倉内貝塚
- (34) 芝公園丸山貝塚
- (35) 三河臺町福岡邸内
- (36) 青山墓地貝塚
- (37) 筭町筭坂上
- (38) 櫻田町
- (39) 山元町善福寺貝塚
- (40) 三軒家町貝塚
- (41) 赤坂六丁目貝塚
- (42) 伊皿子三井邸内貝塚

出率は年平均三八フィートである。(2)一四五九年の江戸城下の海岸線から築地を貫いて現在の海岸線に至る距離は一二〇〇ヤードで、年平均八フィートの進出率を示す。(3)一四五九年の芝海岸からの距離は三〇〇ヤードで、年平均二フィートである。(4)一〇二八年の浅草海岸線からの距離は四、八〇〇ヤードで、それが出来るのに八五〇年を要したから、年平均一七フィートである。(5)一五五八年の船川の舊海岸線から、現在の海岸に到る距離は約二、四〇〇ヤードで、それを形成するのに三二〇年を要したから、年平均二二フィート

江戸



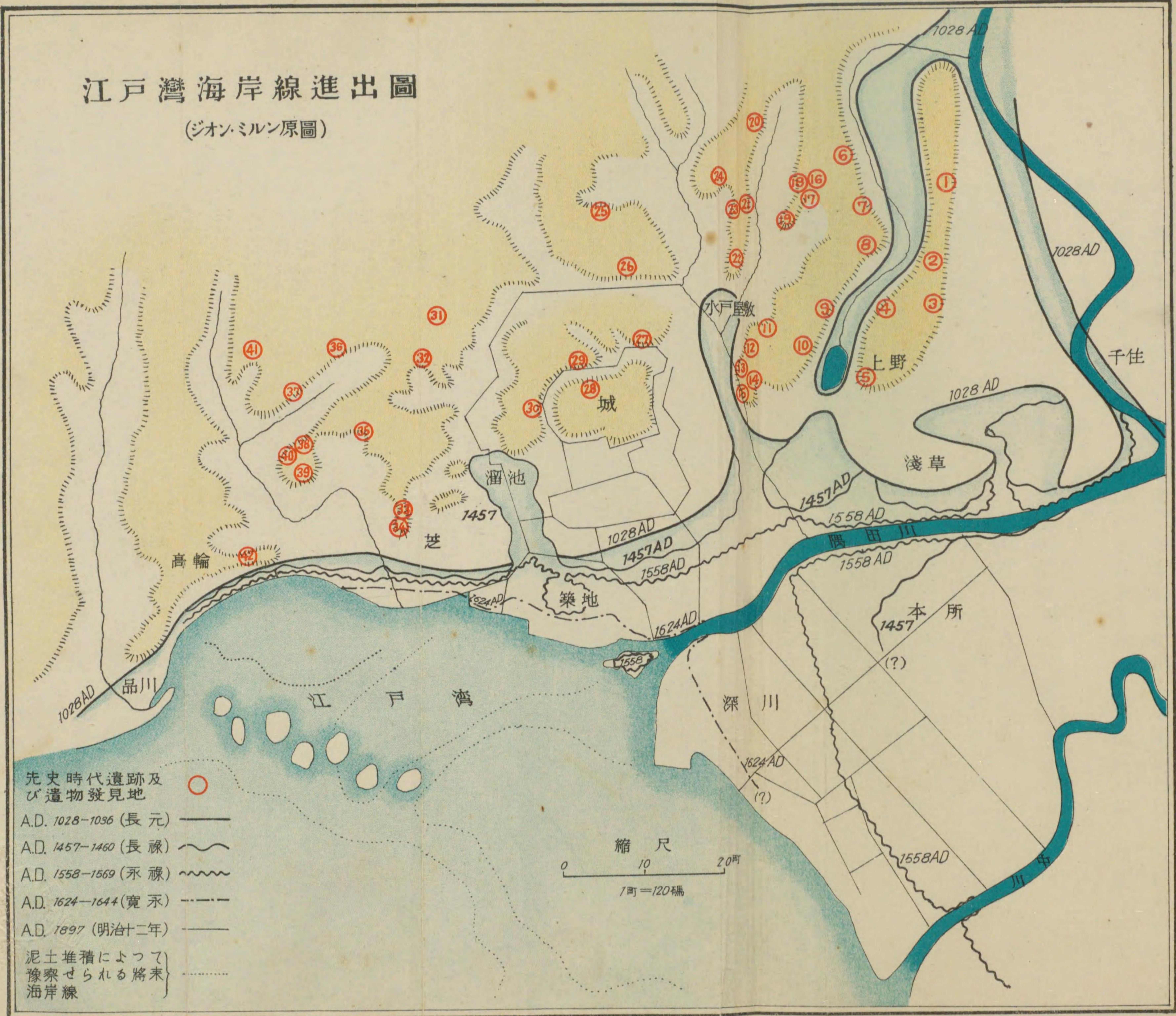
第三圖版 江戸灣海岸線進出圖

此圖はジョン・ミルンが明治十二年に作製したものをアジャ協會雜誌から複寫し、それに東京市附近の先史時代遺蹟を附加したものである。原圖は長元、長祿、永祿、寛永の四年代に於ける海岸線を明治十二年のそれに比較して、年平均幾何づゝ海岸が進出するかを明らかにして、大森貝塚の年代を知つたものである。今日一般に用ひられてゐる石器時代の年代は、大抵此推定を基礎にしてゐるから、此圖は古史界特に先史時代に貢獻することの大きかつた劃期的製作である(一四二頁参照)。先史時代の遺跡及び遺物發見地は、全部丘陵地帯に在り、それらの日には其麓まで海水が侵入してゐたことを示してゐる。遺跡分布圖は高橋一凱氏の調査に據つた。圖中の番號は先史遺蹟を示したものであるが、原圖の比率が間違つてゐるので、正確に記入することが出来なかつた。

- (1) 市外田端の貝塚
- (2) 谷中天王寺境内
- (3) 上野公園新坂貝塚
- (4) 谷中坂町領玄寺貝塚
- (5) 上野公園忍ヶ岡附近
- (6) 上富士神社境内
- (7) 動坂町附近
- (8) 千駄木町
- (9) 彌生町貝塚
- (10) 東京帝國大學内
- (11) 西片町誠之小學校附近
- (12) 本郷弓町貝塚
- (13) 本郷元町琴平神社裏臺地
- (14) 神田明神附近
- (15) 御茶水女子高等師範學校内貝塚
- (16) 小石川林町
- (17) 白山神社臺地
- (18) 植物園内貝塚
- (19) 指ヶ谷町
- (20) 大塚貝塚
- (21) 久堅町
- (22) 傳通院裏貝塚
- (23) 小日向臺町
- (24) 高田老松町
- (25) 牛込山伏町三番地
- (26) 佐土原町貝塚
- (27) 九段阪
- (28) 宮城内紅葉山
- (29) 麴町五番町
- (30) 永田町
- (31) 津守新阪
- (32) 鮫ヶ橋
- (33) 芝紅葉館内貝塚
- (34) 芝公園丸山貝塚
- (35) 三河臺町福岡邸内
- (36) 青山墓地貝塚
- (37) 筭町筭坂上
- (38) 櫻田町
- (39) 山元町善福寺貝塚
- (40) 三軒家町貝塚
- (41) 赤坂六丁目貝塚
- (42) 伊皿子三井邸内貝塚

江戸湾海岸線進出圖

(ジョン・ミルン原圖)



江戸湾の歴史
 1. 江戸湾の形成
 2. 江戸湾の埋立
 3. 江戸湾の防波堤
 4. 江戸湾の干拓
 5. 江戸湾の埋立地
 6. 江戸湾の埋立地
 7. 江戸湾の埋立地
 8. 江戸湾の埋立地
 9. 江戸湾の埋立地
 10. 江戸湾の埋立地
 11. 江戸湾の埋立地
 12. 江戸湾の埋立地
 13. 江戸湾の埋立地
 14. 江戸湾の埋立地
 15. 江戸湾の埋立地
 16. 江戸湾の埋立地
 17. 江戸湾の埋立地
 18. 江戸湾の埋立地
 19. 江戸湾の埋立地
 20. 江戸湾の埋立地